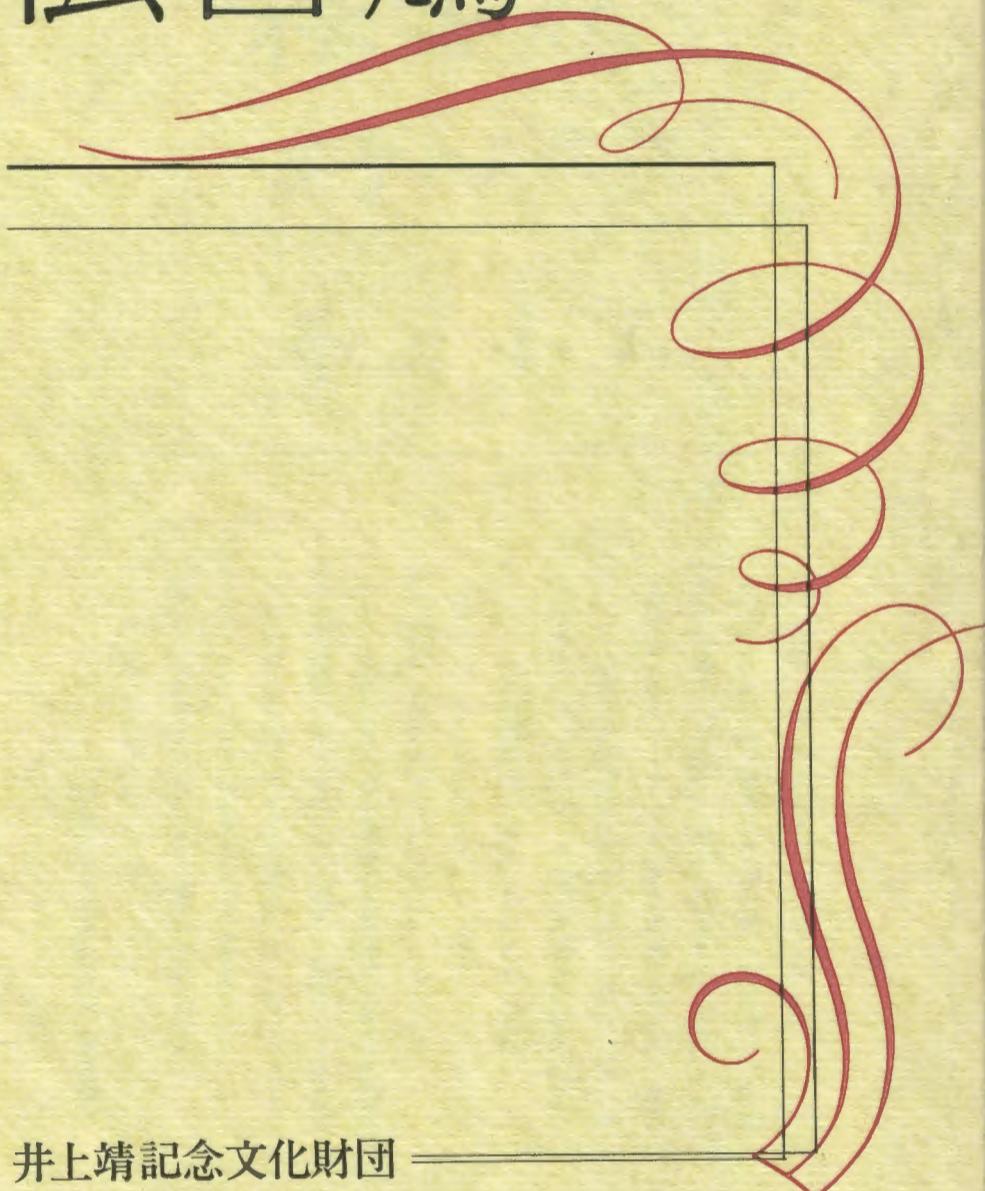


伝書鳩

第3号



井上靖記念文化財団

「伝書鳩」

三号によせて

井上小五

「伝書鳩」も三号を出すことになりました。

井上靖記念文化財団の文化賞も第三回を迎え、作家の陳舜臣先生にお贈りすることになりました。

また、この度、「井上靖文化交流賞」も新たに設けられ、その第一回受賞者として、長年にわたって日本文学の紹介に寄与された、中国の文学者林林氏に決まり、この四月十日には、贈賞式が行われました。

世間の騒ぞうしさに反して、井上靖記念文化財団は徐じよにその礎を築いていると思われます。

一月二十九日は、靖の五年めの命日でございました。その日に間に合うようと、潮出版から励まされていた私の隨筆集『やがて芽を吹く』も、ちょうど二十九日に、なんとか上梓することができました。

良い供養ができると心安まる思いであります。

平成八年四月二十日

(井上靖記念文化財団 理事長)

詩 「六月」

ここから・あそこから・記念館・文学館のある町から

日 次

写真展のことなど

内灘の砂丘を愛した井上靖

「日本海詩人」と大村正次先生

天体の植民地

自己紹介にかえてこのごろ思うこと

山陰に井上靖友の会結成

金沢だより—井上靖を読む

井上靖とわが町

司馬遼太郎先生をお偲びして

第三回井上靖文化賞 陳舜臣氏に贈られる

井上靖文化交流賞新設 第一回贈賞者 林林氏に

井 上 靖 · · · · ·

明 定 義 人 · · ·

森 晋 二 · · · · ·

大 作 恵 伯 · · ·

田 邊 青 志 · · ·

遠 藤 和 彦 · · ·

野 田 和 彦 · · ·

森 井 仁 誉 · · ·

道 男 · · · · ·

遠 藤 仁 誉 · · ·

道 男 · · · · ·

城 所 章 · · · · ·

二 五 · · · · ·

井 上 ふ み · · ·

二 九 · · · · ·

井上靖展——いま歴史ロマンが光る
日南町に「井上靖展示室」が開館
忙しかつたこの一年
『井上靖全集』の担当者となつて

柳谷 香	久城 隆敏	・	・	三五
浦城 幾世	・	・	・	三七
堀 陽子	・	・	・	三九
・	・	・	・	四三

読書感想文コンクール入選作品から

平野 友美	・	・	四六
黒田 佳子	・	・	・
・	・	・	・

特集・井上靖の海外旅行表

文学館・記念館紹介

世田谷文学館誕生	生田 美秋	・	・	七〇
松本旧制高等学校記念館	北原 剛弘	・	・	七三

平成七年度の事業報告

井上 修一	・	・	七五
・	・	・	・

文学館・記念館・住所メモ

七九	八一	八三	八三
・	・	・	・

鳩のお知らせ

詩 「十月の詩」

井上 靖	・	・	八三
・	・	・	・

六月

井上 靖

海の青が薄くなると、それだけ、空の青が濃くなつてゆく。

く。

町に青のスーツが目立つてくる。それに従つて、山野の
青が消えてゆくのだ。

六月一、移動する青の一族。その隊列を横切るために、

私は旅に出なければならぬ。

詩集『北国』所収

ここから・あそこから

文学館・記念館のある町から

高月町立図書館からの発信

写真展のことなど

明定義人

井上靖の写真展を開催

「井上靖が撮ったアフガニスタン展」を一九九五年七月から九月にかけて開催しました。

として纏められたなかから、アフガニスタン篇の写真五十点を選んだものです。写真のあいだに、詩とエッセイを少しはさんでの展示です。

これは一九七三年のアフガニスタン、イラン、トルコの古代遺跡の旅で、井上靖が自ら撮った写真による展示です。『沙漠の旅 草原の旅』（毎日新聞社刊）

写真展を開くについて

井上家にある写真のネガフィルムをわかりやすく整

理すること、製作したパネルは他の図書館等に貸し出せるようにしていたこと、そしてその貸し出しの際には、費用のかかる美術品運送ではなく通常の宅配便を使いたいこと、などを考えにいれて、写真展の準備をはじめました。

井上靖記念室の展示に協力をいただいた、長浜市の長浜スタジオの高橋さんに相談したところ、移動の際に傷つきやすいパネルにはせず写真を額に入れて展示したほうがいいということでした。またフィルムの退色が進んでいるので、ポジスライドをつくつて現状を保持できるようにしたほうがよい、とのことでした。そのようにして写真展の開催ができました。

『沙漠の旅 草原の旅』のイラン篇・トルコ篇も各五十点をこの機会に作ってしまいましたので、これらの写真展も開いていく予定です。

図書館における展示

この事業の全体の経費は約九十万円です。イラン篇

・トルコ篇の写真展を開催すると、総経費は約百二十万円になるでしょう。一回につき約四十万円の経費ですから、写真パネルを借用してそれを美術品運送したときの経費とさほどの違いはありません。

大きな会場での文学展や文学館の展示とちがって、図書館のような日常的な場所での展示は、担当者はそれが主たる仕事でない場合が多いでしょうから、特別なこととしてでなく、なるだけ簡単にできて経費が少なくて済むもののほうが良いと思います。

新しくできる図書館の多くは展示コーナーをもつています。その活用となるとなかなか難しく、展示を積極的にしたいけれど本の貸し出しに追われてできないとか、予算の余裕がないといった館もあれば、そういうことに消極的な館もある、というのが実情です。

展示セットの相互利用ができる

高月で製作した展示セットがあちこちで活用され、

示資料の貸し借りはまだ少ないと思われます。図書の相互協力と同じように、展示資料のほうも貸し借りを

活発にやつていいように思います。

もちろん写真展の開催については財団等のご了承を得てのこととなります。ご後援をお願いすることもあると思われます。

都会で開かれても不思議でない写真展を、湖北の目立たない町でやつているのです。もっと人の集まる所でやつたほうがよいのに、もつたいない、とおつしやるかたもいるのは不思議ではありません。貸し出すことによつて、高月町でつくった資料が一回の展示だけで終わらず、いろんな人に見ていただけるわけです。

本を借りていただき、という図書館本来の業務を疎かにして、展示やイベントに力を注ぐなどということはとるべきことではありません。しかし、図書館が施設として充実すると、本のある空間、場所としての魅力を演出する必要が生じます。「井上靖が撮つたアフ

ガニスタン展」といった展示セットの相互提供がそのための一つの試みとして広がれば嬉しく思います。

これは、図書館だけに限らないことで、井上靖関係の文学館などでもご活用いただけるのではないかと思います。

次回の写真展は

当館としましては、当分は年一回の写真展の開催をこのようなかたちで続けていきたいと考えています。

つぎは中国あたりで「カメラがとらえた井上靖」というのはできないか、などと考えますが、これらのこととは、浦城さまはじめ井上家のみな様や、関係者の方がたのご協力あつて実現できることです。小さな町の私どものできることは本当に少なくて、まことに恥ずかしい限りであります。多くの方がたのご援助を得て歩みを重ねたいと思います。

滋賀県伊香郡高月町（高月町立図書館 館長）

内灘の砂丘を愛した井上靖

森 晋二

わが町は砂丘の町

文庫内に流星の原稿

わが内灘町は、石川県のほぼ中央に位置し、面積は二〇・三八平方キロメートル、人口は二万六千九十三人（平成七年十月末）の小さな町であり、美しい日本海と素朴な河北潟に接し、二つの水面を境する砂洲即ち内灘砂丘の上に拓けた砂丘の町であります。

内灘町立図書館は、昭和四十九年八月に福祉センタービル三階で呱呱の声をあげました。その後、二度の移転を行い、昭和五十四年十一月文化会館の新設に伴い、その二階に開館して以来現在に至っています。

新築移転を記念して「井上靖文庫」を設置いたしま

した。三十平方メートルの小さな一室ですが、文庫蔵書数四百三十五冊を数え、年間利用冊数も約二百冊と一般・大学生を中心によく利用されています。文庫内には蔵書のほかに靖氏の直筆である「流星」の原稿、文学碑を中心に除幕式に御来町いただきました靖氏、御家族の方などのパネル十三枚が展示されています。

内灘になぜ井上靖文庫か

よく同文庫を訪れる人に「内灘になぜ井上靖文庫を設置しているのですか」と質問を受けるのですが、内灘町には、

*図書館の開館事業として「井上靖文学碑」を建設

(昭和五十年三月)

*文化会館に新設移転の折り「井上靖文庫」と名付けた記念室(昭和五十四年)

と、「井上靖……」と名のつく施設が二つあります。なぜこのように井上文学を重視しているかについては、(小生は当時図書館業務に携わっていましたの

で)その時に発行された「図書館ニュース」を引用しますと、

『今考えてみると、伊豆の山村も私の郷里であるが、沼津もまた私という人間を造り上げていく上に郷里であり、そしてそれ以上に三年を過ごした金沢もまた郷里である。一番多感な青春時代の一時期を北陸の城下町で過ごしたことは私にとっては何といつても大きい事件であった。(氏のエッセイより)――

中略――氏は昭和二年に金沢の四高に入学、昭和五年の春卒業までの三年間、金沢に下宿して金沢や近郊を歩き、ことに内灘砂丘と日本海を愛し、たびたびおとずれていたという。氏の最初の詩集『北国』の中の「流星」や詩集『運河』の中の「海」はいずれも日本海と内灘砂丘を舞台としている』

とあり、また文学碑の建設委員長の故竹野清次氏は、『井上靖先生が青春時代にこの砂丘を愛されよく歩かれたということから、図書館開館記念事業に文学碑建設の話が進み、また町が急テンポに変わつてい

る現在、町の新しい方向への一つのシンボルとして、ここにはばたこうとしている子供たちに一つの指標を与えるたい』と述べておられます。このような経過を経て、昭和五十年二月二十九日に靖氏、ご家族その他多数の来賓参列のもと、文学碑の除幕式が行われたのであります。

主碑文

日本海美し

内灘の砂丘美し

波の音聞きて

生きる人の心美し

井上 靖

井上靖展——「砂丘と青春」

爾來、今まで多くの方々に文庫の利用をいただいておりますが、平成四年十月に内灘町町制施行三十周年記念事業の一環としまして「井上靖展——砂丘と青春——」を開催いたしております。

開催に当たりまして、静岡県の井上文学館、石川近代

文学館等を中心に七館四個人より資料を拝借し盛大に実施いたしました。開催中多くの人びとに観覧していただきましたが、その中でも金沢医科大学の周靜聖先生（中国山西省のご出身）が展示会の感想を揮毫してくださいました。（以下原文のまま）

井上先生

日本的一代名流作家

給人類留下了不朽的

・詩篇・永遠值得后

人們的敬仰

「井上靖展」を通じて多くの方々から、いろいろのご意見、ご感想を賜つたのも望外の喜びでした。

図書館では、今後電算化システムの導入にむけて計画を進めてまいりますが、同時に閲覧室を拡張し、一室である「井上靖文庫」を広く利用者の皆さんに活用していただけるよう立案している所であります。

石川県河北郡内灘町（内灘町立図書館 館長）

旭川市「井上靖記念館」から

「日本海詩人」と大村正次先生

大作 恵伯

うつろいかわる蝦夷の地に
かわらぬ清流石狩や

メノコが髪にかざしたる

鈴蘭の香を訪めもみん／略

大村正次

歌は道立旭川東高等学校の教師だった大村正次先生が昭和二十六年に作詞した東校の逍遙歌の一節で、当時は生徒間で愛唱されていたものです。

古びた手元のアルバムをめくると、生徒会の顧問の大村先生の、静かで温情あふれるありし日の姿が中央にあつて、並んだ列の左端に固い表情の私自身が、遠い四十数年前の生徒として座つて写っています。大村

先生には直接授業を受けた機会は少なかつたのですが、生徒会のことでは随分迷惑をお掛けしたものです。

大村先生は戦後、昭和二十一年から昭和三十五年まで旭川東高等学校の生物担当の教師であり、生徒会や生物部の顧問として熱心に生徒の指導にあたっていました。教壇に立つ、温厚で気品のある風格をもつた大村先生の往年の姿を思い浮かべる教え子たちは、地元の旭川だけでなく多くいるにちがいありません。

「日本海詩人」での出会い

「……当時高岡中学の教師をしていた詩人大村正次氏のもとに送り氏が出していた詩誌「日本海詩人」に載せてもらつた。自分が書いたもので、活字にしたのは、これが初めてであつた。高校を卒業する年の二月に、私は石動へ大村正次氏をたずねて行つた。雪がはげしくふぶいている日で、私はそこで夕食をごちそうになりながら、何人かの北国の詩人たちと会つた。」

(「青春放浪」)

富山県石動での大村先生

大村先生は、明治三十一年富山県の岩瀬に生まれ、旧高岡中学校の教師であり、「日本海詩人」を主宰する詩人であります。詩人としての足跡では、室生犀星が発行していた「卓上噴水」に鳳太郎の名前で詩を発表するなど、富山県では最も早い叙情詩人のひとりとして活躍していました。昭和三年には詩集『春を呼ぶ朝』を発刊しています。室生犀星はその序文で「春を呼ぶ朝」という詩には何か清らかさが含まれ、その

井上靖先生が金沢の旧第四高等学校時代に、富山県で大村先生が主宰する詩誌「日本海詩人」や、当時の北陸地方の新聞「高岡新報」(詩の欄の選者大村先生)に投稿するなど、大村先生との出会いはすでに知られています。又、井上先生の詩「青春」の一節「田舎の中学校の教師をしている詩人のもとを訪ねていった」の、その教師が大村先生であったことも、すでに明らかになっています。

清らかさは自分も感じられる清らかさである。大村君の道もかういう清らかさからその精神的な出発をそのままに切り開いていくものである」と、述べています。大村先生はその後詩筆を絶つて、戦後旭川に在住しましたが、詩壇に復帰することはありませんでした。

昭和三十八年富山県に帰郷後は藤岡女子高等学校に勤務し、大村清月の名前で漢詩や和歌に転じ、北陸書院発行の「臨池」誌の漢詩講座に多数寄稿するなどの活動をしていました。昭和四十九年六月四日八十歳で病没しました。

北海ホテルのロビーでの再会

「大村正次氏は北海道でお目にかかり、今もときおり、音信をかわしている。」（「青春放浪」）

昭和三十年七月、文艺春秋新社の講演会が旭川市の公民館で開催され、井上靖先生は、生誕後初めて旭川の土地を踏むことになりました。「作家の立場から」

という演題で河盛好蔵、臼井吉見ら各氏と共に、美唄、旭川、北見、網走、上川町などを講演して回りました。旭川では七月十二日、午後六時から、市の公民館を会場として講演しましたが、この時高校の教師をしていた大村先生と再会し、語り合うことになったのです。

「偶然の機会で君にお会いし、北海ホテルのロビーで語りあつたことは忘れません。今また宮崎君と同じような偶然さで二十幾年ぶりで再会し、昔に変わらぬ親愛の情をもつて一夜を語り明かしています」と、大村先生は、宮崎健三氏と連名で葉書を井上先生宛に書いています。

昭和三十四年一月七日、大村先生と宮崎健三氏は東京の井上先生宅を訪問しました。

「多年の宿願を果しました。茅屋に帰り、大村さんと語り明かしました。井上さんをお伺いしたこの日を機会に詩作を復活しようということになりました」と宮崎氏は礼状の中で井上家訪問の高揚した二人の心情を述べています。このように幾度かの音信を重ねな

がら井上先生との親交を深めていたものと思います。

昭和三十七年八月十日付の暑中見舞の葉書に短歌五首を書き、翌三十八年十月に旭川を離れ郷里の富山県に帰った後の井上先生との音信については不明であります。

昭和五十七年大村先生の死後、八戸市に住む実弟の

大村純雄氏等によつて『大村正次詩集』が発行されました。内容は、詩集『春を呼ぶ朝』と漢詩と和歌、その他手紙等をまとめたものであります。「ゆつたりとしたおおらかさが感じられるが、これは永年、教職を愛し徹底した勉強、努力の賜だろうか」と、純雄氏は編集後記に述べています。

心のかけ橋、旭川の記念館

平成二年九月十九日、二十日。井上先生は出生地旭川での文学碑の除幕式と、旭川市開基百年記念式典に参列され、その特別講演で、旭川への思いを二つも詩に託し、朗読して多くの市民に深い感動を与えてくだ

さいました。

この時、井上靖記念館設置の構想が具体化し、大きく前進しました。しかし、四ヶ月後に記念館の実現を見ないうちに永眠されたのです。平成五年七月に当井上靖記念館は開館、以来多くの市民や全国からの参観者に親しまれています。

旭川と井上先生を結ぶ心のかけ橋には、私の恩師でもある大村正次先生と井上靖先生の、古くからの親交の力もまた、大きくあつたのではないかと考えています。

平成八年一月

(旭川市 井上靖記念館 勤務)

—天体の植民地—

田邊 青志

井上靖文学碑

小説「通夜の客」の舞台になつてゐるF村、それがわが福栄である。「まるで天体の植民地にでもいる思ひであつた」と表現されているそのF村を一望できる峠の高台に井上靖文学碑は建つてゐる。

文学碑は、白御影石、高さ二・八メートル、除幕式は昭和五十三年八月二十六日、井上先生のお孫さんの手によつて除幕されました。

私はその時、先生に通夜の客の一節に出てくる「狐火」のことを聞いたのです。「いやあ、あれは本当のことです。この目で曾根の家（疎開の家）から見ましたよ」と先生はなんとも怪訝な顔で答えてくださつた。

私は、その時の先生の眼に底知れぬ優しさを感じた。この優しさは、先生の全作品の根底に流れているものだと思つた。深い思想と人間愛に満ちた生涯。これが、井上靖の作品の命の源であろう。

碑文

ここ中国山脈の稜線 天体の植民地

風雨順時 五穀豐穰 夜毎の星闌干たり

四季を問わず 凛々たる秀氣渡る ああ

ここ中国山脈の稜線

天体の植民地

井上 靖

井上靖記念館

この「野分の館」は、先生が「天体の植民地」とか「駱駝の瘤」とか表現されている時の文学碑を見おろすように、その高台にたつてある。昭和六十年三月の完成で、先生の詩「野分」にちなんで先生が名付けられたもの。全国からの参観者があとを絶たない。

しかし一番残念なことは、先生にこの館を遂に一度も見て頂くことができなかつたことである。幾度も訪れて下さるふみ夫人はじめ、浦城幾世さん、黒田佳子さんも思いは同じようであります。なにせ世界の文豪、来町の暇がなかつたのであります。

地元では、「野分の館を守る会」を中心に絶えず何

「通夜の客」を読む

「通夜の客を読む会」を始めたのは、平成元年から

時どんな方々に来ていただいてもはづかしくないよう

にと、年中花壇などにも気を配りながら、世界の文豪

との縁であることを思い、誇り一入なものがあります。

私の下手なボランティアのガイドも板についたかず。

公園の寒椿が淡雪をかむつて真っ赤にのぞいでいる。

詩碑建立

井上先生の生前に、町が預いていた詩「ふるさと」は、ふみ夫人の浄書により、黒御影石に刻み、平成四年五月十九日除幕され、この文学公園に一段の風情を添えました。除幕式での夫人の挨拶は特に印象深く、

「通夜の客」に出てくる、あの伯備線の上石見の駅から藁草履を履いて、生後間もない子供を連れて、駱駝の瘤と表現している二つの時の山道を上り下つて疎開の地へたどり着いたことなどなど……。

のこと。場所は井上靖記念館の木の香の匂う「野分の館」。会場の都合もあり、二十名でしめきる。

台本に食い入りながらの熱心さ、初めてとあって皆

緊張して、その輪読もつまつたり誤読ありで、和やかな雰囲気で終始する。

井上さん一家が、終戦となるまでの六ヶ月の間、この鳥取県の中中国山地の福栄村（現在日南町）の小さな茅屋「曾根の家」に疎開されていた当時のことや、そして主人公新津と水島きよが辿るドラマと、辺りの風光のすばらしかったこと、屋号の実名などに、改めてわが古里の、思いもよらなかつた素晴らしさを今更の如く見直すことになったのでした。

当時の様子に詳しい、近所のオオマエのおばあさん

（嶋代さん）の思い出は、真に迫り、一家の「苦労のことが偲ばれて、感泣するのでした。

春になれば久しぶりに、新たなメンバーに呼びかけて、読む会を開きます。その時は、浦城幾世さんにも参加していただくなっています。「わが愛」の

映画にも出てくる「曾根の家」のあの一本杉の下で、読むのもいいかなと思つてゐるところです。

「わが愛」を見る

「通夜の客」が松竹より「わが愛」として佐分利信と有馬稻子の主演で映画化され、曾根の家や一本杉、F村の風光などがでてきますが、ここでは口ヶされてしません。今なら絶対ここで口ヶして貰つたのにと残念におもいます。「わが愛」を観る会を公民館で開催したのですが、結構満員で成功裡に終わり、後の座談会も、古里を見直すべき、と有意義な観る会で、各地からの要望をうけて随時開くことにしてゐるのです。

館の自由ノート

全国からの来館者がメモする、杉の板の表紙の「自由ノート」には、それぞれの思いが込められています。△井上先生の熱狂的なファンの一人であります。氏の作品を四十年間読み続けてきたものです。わが書架に、

百余冊単行本がぎつしり納まっています。先生の生前に、一度この文学館に立ちたかったのですが、今やつと叶えることができました。そして他界された先生の冥福を祈つております。七十二歳にしてその念願を達成した喜びは、いかばかりか分かりません。先生の「野分の館」はすばらしいと思いました。▽

少年とポスト

田邊 青志

(大阪府箕面半町S・Fさん)

△突然「野分の館」を訪れ案内して頂いてから幾年かが過ぎましたが……先生のご逝去の後折にふれて、毎日グラフ別冊の「井上靖記念館」の写真を眺めてはため息をついております。記念館から見た風景は雨にもかかわらず、明るかつたこと、原稿の字が思つたより丁寧であつたこと、記念館に入つて木の香にほつとしたこと、などなど、それに田邊さまにお目にかかるて、どこにでも「きれいなもの」「きれいな日本の言葉」のお好きな方がいらっしゃることが分かつたこと……どれもこれも懐かしい思い出として浮かんでまいります。▽

(愛知県西春日井郡M・Kさん)

鳥取県日野郡日南町（「野分の館」を守る会会員）

空を翔んできた白いポスト

少年は知らない母の「がんばりナサイネ」
ただそれだけの短い便りを読む

空を翔んできた白いポスト

少年は知らない母が「間違いなく運んでネ」
伝書鳩の足に結んだあぶり出しを読む

新しい館長として

自己紹介にかえてこのごろ思うこと

野田和彦

井上文学館にお世話になつてから、はや六ヶ月が過ぎました。私は井上靖の父母国、天城湯ヶ島町の隣町の温泉場に生まれ、育ち、現在も住んでいます。しかも、文学館のある駿河平は、沼津に本店のある銀行に三十余年勤めていた関係で、住み慣れているところです。これほど多くの時間を過ごしながら、この地方のことを、言われてみると知らないことが多く、見てい

るようで見ていない。まして文学のことになると、全くの異次元世界のことで、なんとも始末の悪いものでござります。振り返つてみると、今までの私は効率化社会の中で、スピードが要求され、身近なものにあまり関心がもてない状況に置かれていたかと思います。

我々の日常生活は、多くのものに直に触れ合い、教えられた訪れ、楽しむ、こんな循環があるように思

います。時間をかけて、そのつもりで味わえば味わうほどに、味が出てくるのが普通の生活ではないか、そんな中に多くの感動があるのではないかと思つたりします。同様に文学も、何かのきっかけさえあれば、こんな世界があるのかと味わいながら日常の生活にとり込むことができると思うのです。

井上作品を読んでいて、思いもよらぬ感動を覚えたり、緊張したり、なんとも言えない充実感を味わったり、時には、言葉では言い表わせない情景が、それこそなつかしく、楽しい思いでがよみがえり、しばし言いうのない思いにひたることもある。こんな気持にさせてもらう日常の生活は、今どんな形でこの土地の人びとに育まれているのだろうか。目に見えないものを、形で表わす楽しさを、今如何に感じているのだろうか。恵まれた自然環境の中で、井上靖という作家を世に送り出したこの地方の文化を、より身近に、より深く理解して貰うために、文学館が有効に活用されるよう願うものであります。

幸い先生は存命中、多くの種をまかれました。

時間の重みを感じる人たちが周りにいる間に、今こそ、地域の多くの方がたに文学館の存在を知つてもらい、新しい友の会のメンバーをふやし、愛読者をふやす努力をしたい。時間とともに関心の薄れていくことを恐れるものです。この地方で、平成九年秋、静岡県の音頭で県民が文学に親しむ機会を提供、静岡県の魅力を県内外に紹介する「伊豆文学フェスティバル」が予定されている。是非とも成功させたい。

設立時の「市民の心に結びついた、市民のための文学館にしたい」という原点の思いを微力ながら実現したい。文学活動が会員の楽しい手作りのものであるように、愛好者のための文学館にしていきたいと思います。どうか、関係皆様の一層の支援を頂き、引き続きよろしくご指導の程、お願ひいたします。

静岡県駿東郡駿河平（芦澤・井上文学館 館長）

米子市「井上靖記念館」を縁として

山陰に井上靖友の会を結成

遠藤 仁 誉

平成五年九月、山陰の小都市に、井上靖氏の記念館が誕生したことは、画期的な出来事だった。

井上靖氏と山陰地方は、ほとんど縁がなかつた。太平洋戦争末期、大阪毎日の記者だった氏は、鳥取県日野郡の谷あいの寒村に家族を疎開させていた。その村を舞台に、昭和二十四年『通夜の客』を発表した。

やはりこの中国山地に場所をかり、昭和二十一年には「野分」と題する詩作品を、二十六年に『ある偽作家の生涯』を刊行しているから、山陰とは無縁な作家とはいえないが、それだけで鳥取、島根両県と縁の深い作家とはいえないと思う。

それが、冒頭のように忽然と文学館ができたのだか

ら、まさに画期的なことだつた。

この文学館は、米子市から堺港市へと伸びる弓ヶ浜

半島のなかほど、米子空港近くの広大な松林の中に、

『アジア博物館・井上靖記念館』として生まれた。館長は井上ふみ氏、オーナーは塗料会社ダイニッカ（株）の会長横地治男氏である。

横地氏は島根県隱岐島の出身。明治四十五年生まれの八十四歳。多年にわたつて柔道を通じ井上靖氏と親交があり、横地氏がかねて所有していた織ものの施設を改装するに当つて、井上靖の文学的業績を顕彰する記念文学館をオープンさせたものなのである。

さきに山陰地方と井上靖氏の、そう深いとはいえぬ縁についてふれたが、この国民的作家の愛好者はすぐなくない。その作品の壮大な叙事性と、伏流水のように流れる清冽なりリズムに、強くひかれる読者は年齢をとわず多いぶん多い。このたびわたしたちが、井

上靖友の会の設立を呼びかけたところ、たちまち四百名もの賛同者があつたことからも、井上文学のファンがいかに多いかが知れる。

私ことで恐縮だが、高校生であつた昭和二十五年、ひよんなことから手に入つた詩誌『日本未来派』によつて、井上氏の詩抄にふれ、強い感銘を受け、以後、数多くの井上作品の虜になつての四十年がある。

そこで記念文学館ができると、井上氏の長女浦城幾世氏に相談し、横地氏の了解も頂いて、友の会の結成にとりかかつた。

山陰には、すぐ隣接する松江市に、ラフカディオ・ハーンの文学業績をたたえ、これを顕彰する『八雲会』がある。そして小泉八雲研究に大きな業績をあげ、全国の八雲文学研究者の支えになつてゐる。

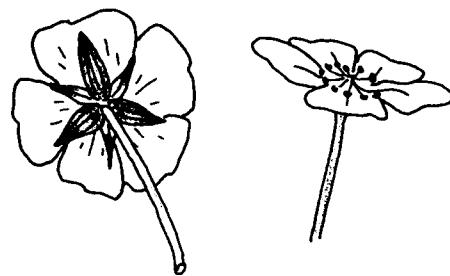
初代会長をお願いした地元の素封家坂口家出身の坂口總子さんとも充分話し合い、松江の八雲会をめざす

組織にしようと、昨年九月二十一日におよそ三百名ほどの出席を得て、「井上靖友の会」結成総会を開催し、西日本で唯一の友の会がスタートすることになった。

これからは、この組織を基盤に、いつそう井上靖文学の愛好者をふやしていきたいと思う。

そのため勉強会、講演会の開催、文学散歩、会報の発行などを計画している。当面、この二月には、聖心女子大学の先生を講師に招いて、講演会を開催し、井上文学の魅力について学んだ。一座建立を旨とし、着実に井上文学愛好者の期待に応えていく考えである。大方のご指導を得たい。

(井上靖友の会会員)



金沢だより

—井上靖を読む—

森 井 道 男

雪国金沢からお便りをさしあげます。

雪国といつても、金沢の冬は東京の酷薄な寒さとはちよつと違います。風にあってもあんな情のない吹きかたはしないのです。風はどこにいる、それは遠くにいる、それはいない、と言うふうな、冷たくても情緒のある吹き方をいたします。

えようとしています。四月「澄賢房覚書」、六月「戦国無頼」、八月「淀どの日記」、十月「櫻の木」、十二月「花壇」。このころから金沢のまちにも冬がやつて来ます。

「井上靖を読む」——この連続講座も、二年めを終

四高の教室だった二階の部屋。黒板も昔のままに架かっているし、多少の隙き間風に入る窓もある日と変わつてはいません。そうですね、窓越しに見える広坂の

通りをぞろぞろ歩く人々の服装が、あの日と較べてい
ちばん変化の目立つところでしようか。

あの日——それは今からちょうど六十七年前、昭和四年二月号の「日本海詩人」なる同人誌に、当時二十歳の四高二年生だった井上靖の詩が初めて載った日です。その詩の題は「冬の来る日」。作者はその同人誌を机の上に置いて、何度も繰り返してそのページに目を当て、教師の話す言葉の意味を追う作業を放棄していったことでしょう。

明日か、明後日か、
やがて巡り来ようとしてる
冬の最初の音づれの日よ、
冬の来る日よ。

桐の落葉一枚、瀬戸の井桁の上におかれ、
懷手して縁に立つ私は、

ひし／＼と迫る晚秋の寂しさを、
落葉をふんでゆく母の老の姿に感ずる。

十月の砂丘の静けさは私の心から遠く去つた。

十月の紺碧の空に何の心残りがあらう。

私は取り出した冬の鳥打帽の黒い色を、
しみじみと棲しみながら、

やがて来ようとしてる冬の日を待つてゐる。

(新潮社『井上靖全集』第一巻参照)

この詩を読み返して、私はふと作者の中に「冬を待つ心」が本当に揺れていることに気づきました。そして、なるほど、と思いました。雪国に住む私たちは、冬は重苦しい季節の到来としか思えないのです。子供たちは雪を使って上手に遊びますが、雪国の生活者たちは、「春を待つ心」は知っていても、なかなか「冬を待つ」のは難しい。

二月——暦の上では立春です。この月は「流沙」を読むことにしました。晩年の井上靖の新聞小説は随分自由な書き方をされるようになっていて、本来それほど文学好きの比率が高い筈のない新聞読者を対象にしながら、いわゆるサービスのない「私小説」的な心境小説に傾いて行っています。「櫻の木」（昭和四十五年）も、「花壇」（昭和五十九年）も、「異国」（昭和五十八年～五十九年）も、皆そうです。

しかし「流沙」（昭和五十三年～五十四年）だけは、ちょっと違うのですね。新婚の若いカップルを主人公に据え、夫の方は考古学者だからといって、妻を女流ピアニストにしたのは何故でしょうか。井上靖が音楽に強かつたとは思えません。いつか金沢での宴席で、「格子戸をくぐり抜け——」と朗々と歌い出されたので、目を丸くして注目していると、すぐに佳子さんにはバトンを渡しておしまいになりました。どうも本

当に歌えるのは、四高の寮歌と応援歌、それから炭坑節、あとは軍歌の幾つかぐらいであつたと思います。

その井上先生がピアニストを書くのだから、これは大変だつたでしょうね。例の」とく、丹念な取材を重ねた上の執筆ですから、ちゃんとつじつまは合っていますが、往年の、読者の胸ぐらを掴んで放さぬような迫力は感じられず、多少「きれいごと」に見えるところがあるのは仕方がないと思います。

また雪がちらついてきました。金沢の冬は長く、春は遠い。次年度のこの講座は、「天平の甍」から始めます。その日は五月六日。井上靖の生誕の日であり、鑑真和尚遷化の日でもあります。金沢にも晩春の陽光が降つていてしまうことでしょう。

（日本ペンクラブ会員）

井上靖とわが町

城所章

追悼・井上靖

「文学のふるさと天城湯ヶ島——文豪井上靖への讃歌」が開催されたのは、平成三年八月二十二日、湯ヶ島小学校講堂であった。

静岡県内の各市町村が、各地域の独自の地域づくりを目指して、「日本一の地域づくり運動推進事業」を実施し始め、天城湯ヶ島町では、この事業を「追悼・井上靖」の標題で開催した。

以下、年順に、井上靖関係の事業の概要を表示する。

井上靖は、平成三年一月二十九日に長逝されたが、天城湯ヶ島町は故郷であり、同町名誉町民でもあり、

「しろばんば」を始め多くの作品に町の追憶や事象を記述していることなどから、この事業は町が企画し、

実行委員五名（伊藤春秀委員長他）、事務局六名（渡辺修宏企画課長＝現助役他）その他多数の方々の支援協力を得て推進され実現した。

年 表

映画上映＝「おろしや國醉夢譚」（井上靖原作）
平成五年一月三十一日

平成三年八月二十二日

井上靖作品読書感想文コンクール

詩朗読＝井上靖詩碑文朗読 「故里美し」＝湯ヶ島

小学校児童 「校歌」＝天城中学校生徒

映画上映＝「しろばんば」（井上靖原作）

公開座談会

講演＝「井上靖と天城湯ヶ島」藤沢全（日大教授）

講演＝「我が父を語る」井上卓也（靖 次男）

メツセージ＝大岡信（日本ペンクラブ会長）

メッセージ＝坂東徹（旭川市市長）

挨拶＝「日本一地域づくりに向けて」下山忠男

（天城湯ヶ島町町長）

刊行＝冊子「井上靖と天城湯ヶ島町」

平成五年一月三十日

朗読＝「井上靖・詩の魅力の朗読と語り」

金子秀夫（詩人）福田美鈴（詩誌焰主宰）

献花＝遺族代表・町長・議長・翌松会代表・実行
委員代表・しろばんばの会会长・湯ヶ島町

井上靖墓地墓参 熊野山にて

映画上映＝「本覚坊遺文 千利休」（井上靖原作）

平成六年一月三十日

表彰＝読書感想文コンクール入選者

審査委員長講評＝傳田朴也（井上文学館館長）

入選者の作品発表＝小・中・高校生 各一名

講演＝「父・井上靖」井上修一（靖 長男）

刊行＝冊子「追悼・井上靖」

平成六年一月二十九日＝前夜祭

挨拶＝伊藤春秀（実行委員長）

財産区議長

遺族挨拶＝井上ふみ（井上靖記念文化財団理事長）

井上靖作品読書感想文コンクール

（応募数＝五百四十二篇 入選数＝三十一篇）

挨拶＝伊藤春秀（実行委員長）・下山忠男（湯ヶ

島町町長） 役場改善センターにて

表彰＝読書感想文コンクール入選者

審査委員長講評＝傳田朴也（井上文学館館長）

入選者の作品発表＝小二名、中・高校生 各一名

講演＝「六十年を共にして」 井上ふみ

刊行＝叢書「井上靖とわが町」第三集

平成七年一月二十八日＝前夜祭

挨拶＝伊藤春秀（実行委員長）

映画上映＝「敦煌」（井上靖原作）

平成七年一月二十九日

「しろばんば」の碑の除幕式 旧井上靖邸にて

開会＝山田正（観光協会会长）

除幕＝井上ふみ・町長・しろばんばの会会长

挨拶＝町長・しろばんばの会会长・町議会議長

撰文者挨拶＝大岡信（前日本ベンクラブ会長）

遺族挨拶＝井上ふみ（井上靖記念文化財団理事長）

叢書「井上靖とわが町」第四集の七二ペー

ジに「しろばんばの碑」建設記事掲載

井上靖墓地墓参 熊野山

献花＝遺族・町長・議長・翌松会会長・実行委員

代表・しろばんばの会会长・湯ヶ島町財産

区議長

遺族挨拶＝井上修一（靖 長男）

井上靖作品読書感想文コンクール

（応募数＝六百四十篇 入選数＝三十篇）

挨拶＝伊藤春秀（実行委員長）下山忠男（湯ヶ

島町町長） 役場改善センターにて

表彰＝読書感想文コンクール入選者

審査委員長講評＝傳田朴也（井上文学館館長）

入選者の作品発表＝小・中・高校生 各一名

講演＝「井上靖文学館・文学碑散歩」浦城幾世

(靖 長女)

刊行＝叢書「井上靖とわが町」第四集

平成七年三月十五日

「しろばんばの唄」作品応募 締め切り

(応募作品数＝三百四点)

四月二十五日＝歌詞入選者 栗原千晶

七月四日＝作曲 小林登(元中学校教諭)

九月十七日＝初披露(天城峠コンサート)

今後多様な分野で活用を予定している

平成七年八月五日

夏の文芸劇場・天城湯ヶ島

小学校校庭井上靖詩碑前にて(夜)

—「井上靖－天空を翔る」—

演出＝山口崇 詩朗誦＝名取裕子・山口崇

大鼓＝小泉ひかる 小鼓＝堅田喜代

三味線＝山口由起・早坂明子

笛＝福原洋子・福原百蘭

琴＝横山裕子

大岡信・吉永小百合のお話やメッセージ

下山町長・井上ふみ・井上修一の挨拶も織り込んで詩と音楽と照明が夢幻的な時と場を創り出し、観客を魅了した。

平成八年一月二十八日

井上靖墓地墓参 熊野山にて

献花＝遺族代表挨拶まで前年に同じ

井上靖作品読書感想文コンクール

(応募数＝八百九篇 入選数＝三十五篇)

挨拶＝伊藤春秀(実行委員長)・下山忠男(天城

湯ヶ島町町長) 役場改善センターにて

表彰＝読書感想文コンクール入選者

審査委員講評＝大川喜雄(教育長)

入選者の作品発表＝小・中・高校生 各一名

講演＝「父・井上靖について」黒田佳子(靖次女)

刊行＝叢書「井上靖－天空を翔る」第五集

紙面都合上敬称を略させていただきました
(町地域づくり実行委員)

司馬遼太郎先生をお偲びして

井上 ふみ

司馬遼太郎先生の突然のご逝去には、本当に驚きました。

先生のご挨拶を頂くことになつておりました。しかし、お体ご不調ということで、急に取りやめになり、大岡信先生が代わつてご挨拶なさつて下さいました。

一月十九日は当井上靖記念文化財団の第三回目の文化賞を、陳舜臣先生にお贈りする贈呈式当日で、司馬

その後、先生は姫路にお出かけになられたと伺つて

安心しておりましたが、今度は急速ご入院、重

体との報に接し、さらに、翌日の報道では、腹部大動脈瘤破裂でご逝去ということでした。

昔のことではあります、私の父も突然の咯血で、奇跡的に九死に一生を得ていますが、このような病気は前兆もなしに突然やつてくるものようです。

司馬先生とは昭和五十年五月八日から二十七日まで

中国旅行にご一緒いたしました。この時が私の初めて

の中国行きであり、一行は戸川幸夫、庄野潤三、水上勉、小田切進、福田宏年等の諸先生方や、日本中國文化交流協会の方々と、北京から無錫、洛陽、西安、延安など楽しい旅になりました。司馬先生はお話を上手で、旅はいつも楽しいものになつたのを覚えています。

私は「一月二十六日」と最後に記された司馬先生からの自筆のお葉書をいただいています。奥様のご了承

を得てここに載せさせていただきます。

「『やがて芽を吹く』をありがたく拝受しました。御力のみなぎつた御文章で、若わかしさを感じました。

先般の井上靖賞の授賞式、陳さんのことでもあり、躍如として出発の用意をしていましたが、家を出る寸前、若い頃からの固疾ともいいうべき脳貧血で倒れました。だらしのないことでした。一月二十六日」

と書かれています。

靖のように太い万年筆でしつかりとした字で書かれています。このようなことになろうなどとは、全くかがえない力強い字です。残念な思いでいっぱいですが、今はもう御冥福を祈るばかりです。

(井上靖記念文化財団理事長)

第三回

井上靖文化賞贈賞者決定

小説家の

陳舜臣氏に

平成七年十一月十三日、千代田区、山の上ホテルで
第三回井上靖文化賞の最終選考委員会が開かれ、満場
一致で陳舜臣氏に贈賞が決定され、当日報道、出版関
係各社に通知された。

文学作品を生みだし、日本人に大きな感銘を与えてき
た業績を評価し、陳舜臣氏に決定したものである。

選考委員 大江健三郎 大岡信 司馬遼太郎 樋口

隆康 平山郁夫 の五氏

(五十音順、敬称略)

日本に生まれ育ち、日本に住みながら、中国人の心
を通して日中文化・文学に取り組み、数多くの優れた

井上靖文化賞とは、文学者井上靖を記念し、日本文化の向上に資するため、文学・美術・歴史等の分野において優れた業績をあげた人、または団体に贈られる賞である。

贈賞 年一回。賞状及び、澄川喜一氏（東京芸術大学

学長）の製作によるブロンズ製の記念レリーフ、
賞金百万円が贈られる。

第一回受賞者 小澤征爾氏（音楽指揮者）

第二回受賞者 ドナルド・キーン氏（日本文学研究者）

第三回受賞者略歴

一九二四 二月十八日 神戸に生まれる

一九四三 大阪外語大学印度語科卒業

一九六一 「枯草の根」でデビュー 江戸川乱歩賞受賞

一九六九 「青玉獅子香炉」で直木賞受賞

一九七〇 「玉嶺よふたたび」「孔雀の道」で日本推

理作家協会賞受賞

一九七一 「実録アヘン戦争」で毎日出版文化賞受賞

一九七六 「敦煌の旅」で大佛次郎賞受賞

一九八三 「叛旗—小説・李自成」で日本翻訳文化賞

受賞

一九八四 N H K放送文化賞を受賞

一九八九 「茶事遍路」で読売文学賞・紀行賞受賞

一九九二 「諸葛孔明」で吉川英治文学賞受賞

一九九一 朝日賞受賞

一九九四 日本芸術院賞受賞

その他代表作 「中国の歴史」全十五巻、「小説十

八史略」全六巻、「江は流れず—小説日清戦
争」上中下巻、「陳舜臣全集」全二十七巻、

N H K大河ドラマ「琉球の風」、「耶律楚材」

上下巻などがある。

第一回 井上靖文化交流賞

中国の詩人

林林氏に贈られる

「井上靖文化交流賞」の新設について

井上靖記念文化財団は、設立当初より「海外における日本文化の研究者または研究団体に対する援助」を事業の一つに考えており、理事会、評議会においても、かねてよりこの事業の実現方法を検討しておりました。が、このたび「井上靖文化交流賞」の設立という形で贈呈式ならびに祝賀パーティは、日本中国文化交流

具体化することになりました。

第一回の本年度は、中国の詩人で日本文学研究者の中国日本友好協会副会長の林林氏に贈賞することが提案され、林林氏も快く受諾してくださいました。

協会と一ツ橋綜合財団のご協力により、四月十日（水）二時より、ホテルニューイーハウスにて、盛大にとり行われました。

顕彰理由　中国文学者として、日本文学を深く理解し

著述活動を通じ、日中の友好のために尽力するとともに、日本の短歌、俳句の形式に

呼応して、中国に「漢歌」「漢俳」という定型詩を創案し詩作するかたわら、広く人にひろめたことをもつて顕彰理由とする。

著書　『インド詩集』『雁來紅』等の詩集

『扶桑雜記』等の散文集

『日本古典俳句選』等の翻訳

一九八〇年　中国作家代表団副團長として来日
一九八三年　中国日本友好協会副會長
一九八八年　中国人民对外友好協會代表団として来日
一九九三年　中国日本文学研究会会长

林林氏の略歴　（本名　林仰山）

一九一〇年　九月二十七日福建省詔安県に生まれる
一九三三年　中国大学政治経済系卒
一九三四年～三五年　早稲田大学政治経済学部留学
一九四八年　中国文学芸術界協会香港分会理事
一九五五年　駐インド中国大使館文化参事官
一九六一年　AA作家会議代表団秘書長として来日

井上靖展

いま歴史ロマンが光る

柳谷香



平成七年九月十四日（木）から十一月五日（日）まで、兵庫県姫路市の姫路文学館で「井上靖展——いま歴史ロマンが光る——」が開催されました。

姫路文学館は、姫路市の市制百周年事業の一環として設立された市立の博物館で、世界文化遺産・国宝姫路城の北西側に位置しています。

井上靖氏は、その数多い著作や美術への造詣の深さ、

最晩年までの精力的な社会活動などによって、市民の高い関心を得ており、従来からぜひ展覧会を、という声が強くありました。このたび、井上家と井上靖記念文化財団の温かいご理解、ご協力を頂戴し、晴れて実現の運びとなつたものです。

初日の九月十四日には、一般公開に先だって、関係者による開会式が行われました。この日のために、井上ふみ、浦城幾世のお一方がわざわざ東京から駆けつ

けてくださいり、毎日新聞大阪本社事業本部長の鳥居宏司氏らと共にテープカット。

会場では、初期作品から新聞連載での人気の高まり、数々の歴史小説における模索の過程が、自筆原稿や初版本、掲載誌、創作ノートなどによつて示され、一つ

ひとつの資料をじっくりと覗き込む来館者の姿が目立ちました。また、氏の詩人としての成果である八冊の散文詩集や、四高以来の柔道関係の資料、シルクロードの取材のスクラップ帳なども人気を集めました。

さらに、会場の一角では、「親鸞」と利休ー私の中の日本人」と「私のライフワーク」の自筆原稿の全文を一気に展示。太字の万年筆の力強い筆致からは、老練な作家の氣迫が感じられたように思います。

会期中にはイベントもありました。まず開会式に統いて行われた井上ふみ、浦城幾世の両氏による「トーキショード・井上靖を語る」。夫として、父親としての

靖氏の知られざる素顔など、楽しいお話を満員の会場から大きな拍手が湧きました。

十月十日には、井上修一氏を講師にお招きし、講演会「詩の創造と日常生活ー井上靖の場合ー」を開催しました。メモを取る熱心な聴講者も少なくなかつたようです。

十月十五日には、井上文学ファン待望のビデオ上映会。五所平之助監督の「猶銃」（昭和三十六年、松竹）を文学館講堂で上映しました。ほぼ原作に忠実な内容ながら、スクリーンで繰り広げられる美男美女の恋模様はまた格別。難しい話は抜きにして、文芸娯楽作品を大いに楽しんだひとときでした。

一つの展覧会が無事終了するまでの過程には、陰にたくさんの方々のご助力があります。関係の皆様に誌上をお借りして深く感謝を申し上げます。

「井上文学展示室」の建設

日南町からのお知らせ

久城 隆敏



先生と本町の関係は、前号でもご紹介いただきましてよう、終戦間近の昭和二十年六月、戦火をさけるために、日南町神福（当時、福栄村）に奥さんや子どもたちご家族を疎開させられたことに始まります。

その後、日南町の美しい自然、人情、風俗は、先生によって、小説「通夜の客」、詩「高原」「野分」で広く全国に紹介されることになり、町民の先生に対する敬慕の念は非常に深いものがあります。

「駅から峠を二つ越えてここにやつてきました。ワラぞうりをはいて疎開してきたこの道は、一人がやつと通れるほどの小さな道でした。ここまで来れば、もう爆弾も落ちないとthoughtました……」とふみ夫人が述懐された文学詩碑「ふるさと」の建立から四年、この日南町に、新たに井上文学の展示室が誕生します。この展示室は、本年六月にオープンする「日南町総合文化センター」の中にあり、先生の軽井沢の別荘を模した部屋となっています。そして、この展示室に隣接する図書館や美術館を効果的に活用し、広く井上文学を紹介していくことと考えております。昨年十月には、工事関係者とともに、軽井沢の別荘を見渡し、部屋の大きさ、調度品などを見させていただきました。先生が随分気に入られ、毎夏過ごしておられたという別荘を、そのままに再現いたします。

この家族の疎開の地であったここ日南町には、これまでも、タシケントの「バラクハン寺院」という建物を

イメージした六角型の文学記念館「野分の館」と、二基の碑がありました。そんな町に、新たに生まれる井上文学展示室。敷地内には、先生の作品をイメージするモニュメントも展示します。そこには、活字だけでは伝わらない、静止的で絵画的なイメージを抱く先生の世界が広がっています。そして、井上先生と対話できるような空間を創造したいと考えています。

井上文学展示室のオープンは六月五日。同時に開館する日南図書館には「井上靖コーナー」も設置します。先生が、神々も住みたなるところ——「天体の植民地」と詠まれた日南町。どうか覚えておいてください。

鳥取県日野郡日南町

(日南町総合文化センター担当)

忙しかつたこの一年

浦城 縣世



平成七年にも、父に関連したいいろいろな催しや行事が行われました。そのうち、私が直接かかわりましたものの中から報告させていただきます。

一月二十九日、父の命日で、故郷の伊豆湯ヶ島の井

上家跡地に「しろばんばの碑」が建立され、午前中にその除幕式がありました。毎年この日には「井上靖作品読書感想文コンクール」の授賞式が行われます。この応募作品を持つて、湯ヶ島町の関係者や、沼津文学館友の会の方々と一緒に、井上家一族の者たちがお墓

まいりをいたしました。一族の誰かが母を引っ張りながら、竹やぶや、雜木林の中を熊の山のお墓まで登る道のりはなかなか楽しいものです。

午後の授賞式の後、私から、各地にある井上記念館が、それぞれどんな特徴を持つた記念館であるかをスライドを見ていたときながら説明いたしました。なれない私にとりましては大変な仕事でした。

七月二十七日、夕方から湯ヶ島小学校の校庭にある靖の碑「地球上で一番清らかな広場……」の前で文芸劇場「井上靖天空を翔る」の催しがありました。大岡信氏の詩の解説、山口崇氏と名取裕子さんの詩の朗読、吉永小百合さんのテープで語った父の思い出など、素晴らしいプログラムで感動いたしました。もつともつと多くの方に見ていただきたかったと残念に思いました。

二月十二日、オペラ歌手の東敦子さんの演奏会が横浜のはまぎんホールで開かれました。第一部では、高田三郎氏が井上靖の詩「夕映え」「風」「比良のシャ

クナゲ」「モンゴル人」「残照」を作曲された組曲が初演されました。招待をうけ母と出席いたしました。

東さんが舞台の上から母を紹介され、スポットライトを浴びながら花束を頂戴いたしました。大勢の皆様から拍手を受け、母にとりましては、晴れがましいひとときでした。

三月三十日、世田谷文学館開館。式典とレセプションに出席いたしました。九月一日より十月八日まで、「深田久弥と山の文学展」が開催されましたが、父の「水壁」の資料その他を出品いたしました。

三月三十一日、旭川井上靖記念館の運営のための相談役会が高輪プリンスホテルであり、旭川市教育長と館長より報告をうけました。

七月一日から九月三十日まで、夏休みを挟んで、滋賀県高月町図書館の中の井上靖記念室で「井上靖の撮ったアフガニスタン一九七三」写真展が開催されました。毎日新聞社より『沙漠の旅・草原の旅』『流沙の旅・ゴビの旅』の二冊の写真集を出していますが、写

真展は、初めての催しでした。「父の撮った西域のフ

イルムが沢山あるので展覧会を開いてみては如何ですか」とお話をしてあつたものが実つたものです。九月半ばに母と見にまいりました。

九月十四日、姫路市文学館で「井上靖展」が開催されました。開会式の後のトークショーに母と出演し、緊張のひとときを過しました。八月半ばから九月初めにかけての何回もの打ち合わせや展示品出しなどと、次に述べる友の会の設立準備とが、時期が重なつて、てんやわんやの状態でした。

九月二十一日、米子井上靖記念館の二周年記念の行事として、「井上靖友の会」の発会式が行われました。

この記念館は建設段階からタイルや壁紙、展示ケースを決めたり、キャブショーンを書いたり、来館される方についてお見せするかを考えたりと、私にとりましては思い入れのある館です。山陰地方に友の会を作ることには建設途中からの私の夢でした。一部の限られた方の会ではなく、若い人から年配の方まで幅広く入会しや

すい会を作りたいと思っております。

当時、日本海新聞社に勤めておられた遠藤仁誉氏と知り合いになりました。この方は「私の青春は井上先生の小説と共にありました」とおっしゃるほど、父の文学のファンでした。「記念館が勢いのあるうちに友の会を作りましょう」ということになり、坂口総子さんを紹介して下さいました。非常にパワーのある明るい女性です。亡くなられた父上は「会いに行く人は、まず井上先生の本を読んでから行かなければならなかつた」と言われたほどの父の大ファンだったと伺い、お互いにすぐ親しくなりました。

「浦城さんが一生懸命なので私もお手伝いします」といつて会長を引き受けて下さいました。お手伝いどころではなく、「この半年、口を開けば井上靖友の会と何百回言つたか分かりません」と言われる程熱心に友の会作りをやつっていました。夏には一緒に隠岐の島へも行きました。学校の先生はじめ三十名くらいの方たちと夕食を共にしながら「友の会を作りたい

のでぜひお力を貸して下さい」とお願ひもいたしました。松江にも出掛けました。入会して下さった方がさらに友人を誘つて下さり口伝えで輪が広がつていきました。

井上靖友の会という相互の利害のない会のもとに男子を中心に境港、安来、松江、隱岐、また島根県からも地域の垣を越えて四百七十名もの入会者がありました。山陰の方たちが、文化的な集いを求めていたというタイミングも良かったのでしょう。私の願いであつた限られた人でなく、いろいろな方たちが入会してくださつたのは、うれしいことです。誰も知人のいなかつた山陰地方に、大勢のかたとお知り合いができました。これからどんな活動をしていくかと私の夢は楽しく広がります。東京にも将来、井上靖友の会的なものが出来ますれば、どんなによいでしよう。夢に終わらないように皆さまのお力を借りてがんばつて行くつもりでおります。

平成八年には中国山脈の麓で私たち家族の疎開地だ

つた日南町にも、りっぱな文化ゾーンができ、軽井沢にある父の書斎を模したものが作られます。そのための打ち合わせも何回もいたしました。

平成七年は、私にとりまして大変多忙な年でした。各記念館からお声をかけていただきいた行事のいくつかは参加することが出来ず残念に思いました。

十一月末に旭川の記念館でお手伝いして下さつているナナカマドの会の方たちとのお食事会は、楽しいひとときでした。寒い旭川の街は「赤い実の洋燈」^{ランプ}と父の詠つたナナカマドの赤い実が満開でした。

(井上靖 長女)

「井上靖全集」の

担当者となつて

塙 陽子

生前、井上先生にお目にかかつたことはほとんどなかつた。まつたくではなくて、ほとんどなのは、ただ一偏に出版社勤務という仕事柄の故である。ある時は、

然るべきお祝いの会場において、大勢の人々に囲まれた先生を肩越しに拝見したり、どうかするとそれ違ひざま、ほんの間近におめにかかつたり、またある時は、受付係という名目上、お胸のあたりに花やリボン

を付けてさしあげたり、署名なさる先生のお手元をじつと見ていたりしたものだ。当然のことながら、一方

世田谷区桜のお宅に伺つたことが二度ある。いずれもお玄関先であつた。いちどは、東山魁夷画伯の画文集（全十巻・別巻一）のカタログ用推薦文をいただきに、もう二回は、お使いであつた。

また、前全集の「井上靖小説全集十 伊那の白梅大洗の月」の巻の月報へ安曇野への旅▽は、お原稿が出

來たと東山先生宅よりご連絡が私宛にあり、中山まで
いたきにあがり、持ち帰つて全集担当者に渡したもの
のだつた。

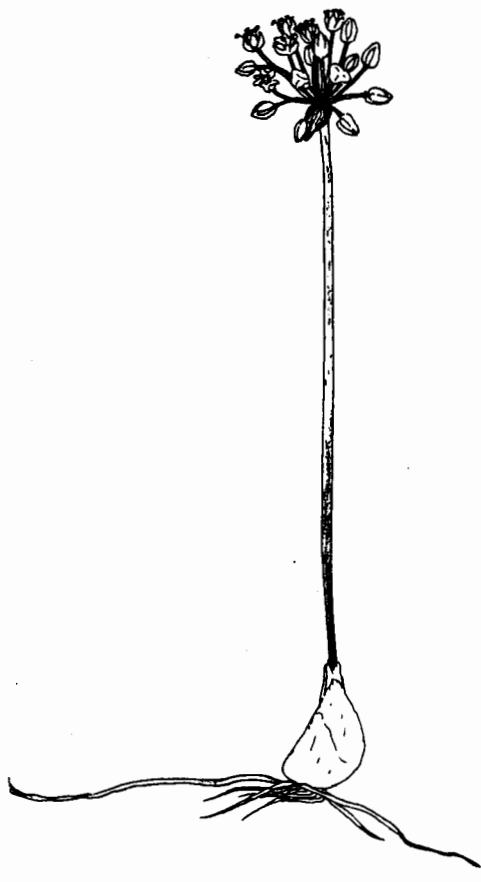
なにはともあれ、残念なことにこの程度に御縁が浅
かつたということだ。このような人間が、没後の全集
に携わるなどということを、先生はお考えになられた
ことがあつたであろうか。苦笑なさつておられるに違
いない。

中学、高校生の頃は、新聞小説の全盛期であつた。
思い出すだけでも、石川達三「人間の壁」、石坂洋次
郎「山と川のある町」、川口松太郎「新吾十番勝負」、
遠藤周作「おバカさん」、山手樹一郎や源氏鶴太、石
井桃子や湯川秀樹なんていうのもあつた。おそらく總
て、朝日新聞掲載のはずである。家で購読していたの
が一紙朝日のみであつたから。

これらの新聞小説の中に「氷壁」があつた。中学一、
二年生の頃だ。その数年前に、母親が熱心に読んでい
たものに、同じ著者のものがあつた。今調べるに「あ
した来る人」であつたろう。女親と争つて「氷壁」を
読んだものだが、男女の綾を汲むには、程遠かつた。
ナイロン・ザイル事件が世間を騒がせたこと以上に、
「氷壁」そのものが話題になり、ベストセラーになつ
たことも、その後数年を経て、理解した次第であつた。
「渦」連載の頃である。

その後も、ときどきの話題作など、幾篇かは目を通
してきたが、いわゆる井上通ではない。今全集の担当

となり、実際のスタートをきつた昨年五月、スタッフ三人、編集協力を下さっている曾根博義氏も御一緒に、静岡県駿河平の井上文学館、天城山昭和の森会館などを訪ねてひそかに全集の報告をしてきた。必勝祈願をするスポーツ選手のごとく、また縁の地や人々を訪ねる俳優さんたちのごとく、無事に全巻完結しますようにと、祈願してきた。



また、六月には、札幌出張の足を延ばして、旭川の井上靖記念館に、十一月には姫路文学館での井上靖展にと出掛けた。こんなことでも、ご縁づくりや、全集の役に立つかしらん。苦い先生のお顔が目の前に浮かぶ今日この頃だ。

(新潮社出版部 井上靖全集担当)

第四回 井上靖作品読書感想文コンクール

(平成七年度 入選作品中 高校生の部 「優秀賞」作品)

「ある偽作家の生涯」を読んで

藤枝南女子高等学校三年生

平野 友美

人生のなかでは、何度も出会いがあります。それは良い出会いばかりではなく、悪い出会いの時もあります。しかし、良い出会いと悪い出会いを見分けることは難しいと思います。何年かたった時に人生を振

り返り、(ああ、良い出会いだったな)と感じるのはと思います。

この話は、原芳泉という男が、一人の天才との出会いをしたばかりに、偽作家としての生涯を送ることに

なつてしまふというストーリーです。大貫桂岳の伝記を依頼されていた元新聞記者だった男は、彼の生涯を掘りかえしていくうちに、彼の偽作品を描く男に興味を持ちます。天才画家、大貫桂岳との接触によつて、うち負かされ消え去つていった偽作家原芳泉の生涯を折り込みながら、その貧寒孤独の生涯をとても上手に描き出していると思います。作者はこの作品で、人間の悲しい真実は桂岳のような人間にではなく、芳泉のようないい社会あるいは人間関係のもつ冷酷な掟に堪えられないで、戦いに敗れてしまつた、あるいは戦いを放棄してしまつた男にあるのではないかと言つてゐるよううに思ひました。誰にも知られない片隅で、誰にも通じ合わない「小さな真実」を心に抱いたまま、社会に背を向けた世捨て人的な生涯を送つた芳泉。井上靖の小説には、しばしば芳泉のような一つの「小さな真実」を抱いているがゆえに、世間との調和ある生涯を送ることができるず、あらゆる善意の人間関係を信じられなくなつてしまい、社会の片隅で、一種の人間嫌いとし

て、敗残者の後半生を送るといった主人公がでてすることがあります。井上靖の作品を読むと、俗世間の人間関係の犯すことができない心の奥深くには、かならず一つの真実が秘められているように感じます。彼らは最後の一点で、他人を容れない固い芯のようなものを心に保持していると思いました。天才ではない一人の凡人に、この世の厳しい掟の中では顧みられるとのない一つの「小さな真実」を見い出しているようです。小さいがゆえに、それはいつそう真実であり、彼らのような人間こそ本当の意味で偽りなく生きたのだということが秘められているように思います。

私も、まだ十八年間しか生きていませんが、これまでも、いろいろな出会いをしていません。それとでに、いろいろな出会いをしました。しかし、まだ私の運命を変えるほどの出会いをしていません。それとも、私が気づいていないだけでしょうか。たつた一つの出会いで、こんなに、人生が変わつてしまふなんて、人間というのは本当に小さな存在なのだと、悲しくなつてしまします。どうして、芳泉と桂岳の出会いは

良い出会いになれなかつたのでしようか。もつと、良い方の道に導くことはできなかつたのでしようか。天才画家、大貫桂岳を目標に、努力することはできなかつたのだろうかと、残念でしかたがありません。桂岳と出会つた時に、もう少し芳泉が強い心を持つていたら、あるいはこのような人生を送つてはいなかつたのではないかでしようか。それともこういう人生を送るところが彼のさだめだつたのでしようか。

この作品を読み終えた今、私の脳裏には、原芳泉が夢中になつてゐた桔梗色の花火が、悲しげに散つています。芳泉の悲しい運命が、桔梗色という悲しげな色と交差して見えるのです。彼は、自分の人生をどう思つていたのでしょうか。途中で振り返ることはなかつたのでしょうか。それなりの才能があり、多少の努力をすれば、桂岳のような天才とはいえないが、それなりに有名になつていたような気がします。

桂岳と芳泉がまだ若かつたあの時、彼らはお酒を酌みかわしながら、何を考え、何を話したのか、私はと

ても興味があります。同じ時間を共有した二人が、一方は天才画家といわれ、地位も財産も手に入れているのに対し、もう一方は、偽作家となり、あげくのはて、指を三本も失い、妻にも逃げられてしまうなんて、なんて皮肉なのでしょう。しかし、新聞記者が芳泉に興味を持つたように、私も芳泉の生涯にひかれました。人間の人生なんて、どうなるか分からぬのですが、最後に自分が納得できるように、日々、一生懸命がんばりたいのです。そして、桂岳のような天才ではなく、凡人でも芳泉のように、本当の意味で偽りなく生きていくたいと思います。

（「第四回井上靖作品読書感想文コンクール

平成七年度入選作品集」から転載）

同じ地に少なくとも二度は訪れるのが私の旅の仕方ですから

来年も西域には行きたいですね

井上 靖

井上靖の海外旅行表

九三七＝昭和十二年

三十歳

中国（旅行の数には、いれず）

九月二十二日～十三年一月十九日

行先＝金山・奉天・天津・豐台・保定・正定・

石家莊・元氏・秦皇島

昭和三十四年十月「蒼き狼」を連載

目的＝昭和十二年八月 日華事変に兵役で応召

脚気のため四ヶ月で内地送還 四月除隊

九月二十二日＝宇品港出港

翌年一月十九日＝大阪港上陸

ヨーロッパ（第一回） アメリカ（第一回）

同行＝スエーデン・ノールウェー・フィンランド

・デンマーク・イタリア・ギリシャ・スペイ

五十歳

一九五七＝昭和三十二年

十月二十六日～十一月二十二日

中国（第一回）

同行＝北京・上海・杭州・武漢・蘇州・廣州

目的＝「第二回中國訪問日本文學者代表團」の一

員として 井上靖にとつては戦後初めて
の訪中 まだ日中間に国交のない時代

目的＝初めての欧米訪問 每日新聞社特派員とし
てローマオリンピック観戦記事を書く

同行・関係者＝高原富保・二村次郎・斎藤榮一・

金子静雄・角田明夫妻・須佐光雄

同行＝山本健吉・多田裕計・十返肇・中野重治・

堀田善衛・本多秋五・小畠真一・木村菊男

昭和三十二年三月「天平の甍」連載

昭和三十三年七月「樓蘭」を連載

昭和三十四年一月「敦煌」を連載

イタリア ローマ滞在――――――

七月三十日～九月十三日

一九六〇＝昭和三十五年

七月二十日～十一月二十八日

五十三歳

昭和三十八年八月「風濤」を連載

リフオルニア・シアトル・ハワイ(ホノルル)

九六三||昭和三十八年

五十六歳

同行(長男)修一

九月二十七日～十月二十五日

目的||小説「わだつみ」取材 米国國務省招待
滯米中叔父井上欣一夫婦ほかアメリカ在住
日本人一世等と会う

中国(第三回)
行先||北京・西安・南京・揚州・上海・杭州・

広州
揚州の旅(第一回)

目的||「訪中日本文化界代表団」一員として鑑真

和上円寂千二百年記念集会参加のため

同行||安藤更生・宮川寅雄・佐木秋夫・長澤元夫

・長島健

九六四||昭和三十九年

ソビエト(第一回)

五月二十五日～七月二十五日

ソビエト(第一回)

九六五||昭和四十年

五十八歳

五月五日～六月八日

五十八歳

九六四||昭和三十九年

行先||モスクワ・レニングラード・タシケント・

ブハラ・サマルカンド・ビヤンジケント・

五月二十五日～七月二十五日

目的||ソ連領中央アジアを訪ねる

九六五||昭和四十年

行先||シアトル・シカゴ・ワシントン・ボストン

・ニューヨーク・ニューオリンズ・ダラス

・ロサンゼルス・サンフランシスコ(カ

アメリカ(第二回)

同行||永田一條・野村尚吾・加藤九祚・福田宏年

・常盤茂雄・(長男)修一

五月五日||横浜港発

口シヤ ナホトカ・ハバロフスク・モスクワ・レ

一九六八||昭和四十三年

六十一歳

ニシングラード

五月七日 ～ 十六日

ソビエト（第二回）

西トルキスタン タシケント・ブハラ・サマルカ
ンド・ドシャンベ・アンジュハバード

行先||モスクワ・レニシングラード・キエフ・タシ

五月十六日 ～ 二十九日

ケント・フェルガナ・アンディジャン・マ
ルギラン・ウルゲンチ・フルンゼ・ノボ

シベリアの旅 イルクーツク・ハバロフスク・ナ
ホトカ

シビルスク・イルクーツク・ハバロフスク
・ナホトカ

五月三十一日 ～ 六月六日

目的||小説「おろしや國醉夢譚」舞台調査のため

昭和四十一年一月「おろしや國醉夢譚」連載

同行||加藤九祥・（妻）ふみ・（次女）佳子・ア

昭和四十一年一月「わだつみ」第一部を連載

ンチビン

口シヤ モスクワ・レニシングラード

一九六七||昭和四十二年

六十歳

五月九日 ～ 十八日

西トルキスタン キエフ・タシケント・フェルガ

アメリカ（第三回）・ハワイ

ナ・ウルゲンチ・フルンゼ

目的||ハワイ大学夏期セミナーの日本文学講師と

して滞在する

同行||（妻）ふみ

ハバロフスク・ナホトカ

シベリア

六月一日 ～ 二十日

六十四歳

アフガニスタン

カブール・バーミアン・

クンドウズ・マザリシャリフ

三月八日 ～ 三月二十一日

アメリカ（第四回）

九月二十二日 ～ 二十九日

ネパール カトマンズ・ヒマラヤ

行先＝サンフランシスコ ほか不詳

九月三十日 ～ ～ ～ 十月十一日

目的＝小説「わだつみ」取材

ヒマラヤ登山

関係者＝フレスノの平喜久男宅に滞在

昭和四十四年一月「わだつみ」第二部連載

インド デリー・カルカッタ・ダージリン

一九七〇年 昭和四十六年 六十四歳

十月一日 ～ 七日

九月二十日 ～ 十月十六日

十月十一日 ～ 十五日

アフガニスタン（第一回）

行先＝アフガニスタン・ネパール・インド

十一月九日 ～ 十一月十二日 六十四歳

目的＝ヒマラヤの観月旅行

韓国（第二回）

同行＝生沢朗・石原國利・伊藤經男・上岡謙一・ナジブラ・モハバッド・（次女）佳子

行先＝慶州・大田・ソウル

目的＝「美しいものとの出会い」の取材旅行

〔インド デリー〕

九月二十日 ～ 二十二日

同行＝杉村友一・（次男）卓也

慶州 十一月九日～十日

天田 十一月十日～十一日

ソウル 十一月十一日～十二日

昭和四十六年一月「美しきものとの出会い」連載

アフガニスタン カブル・クンドウズ・マザリ

シャリフ・カンダハル・ラシカルガ

五月十七日～二十七日

イラン ヘラト・ミシエド・グルガン・ラムサ

ール・テヘラン・イスハハーン・ペルセポ

九七三 昭和四十八年 六十六歳

五月十六日～六月二十一日

アフガニスタン（第二回）

行先＝アフガニスタン・イラン（第一回）・トル

コ・インド・フランス

目的＝アレキサンダー大王の足跡を辿りオリエン

トの古代遺跡を訪ねる

同行＝江上波夫・平山郁夫夫妻・長島弘三・石黒

孝次郎・寺内洪・今里広記・貫井美佐・ナ

ジブラ・モハバット・妻木弘信・福島徳佑

・山口幸四郎・高橋努 田中

インド ニューデリー

五月十六日～十七日

アフガニスタン カブル・クンドウズ・マザリ

シャリフ・カンダハル・ラシカルガ

五月十七日～二十七日

イラン ヘラト・ミシエド・グルガン・ラムサ

ール・テヘラン・イスハハーン・ペルセポ

九七四 昭和四十九年 六十七歳

五月二十七日～六月十日

トルコ アンカラ・カイセリ・ユルギュプ・コ

ニヤ・イスタンブール

六月十日～十九日

フランス パリ

六月十九日～二十日

九月二十九日～十月十一日

中国（第四回）

行先＝北京・上海・南京・揚州

揚州の旅（第二回）

目的＝「日本中国文化交流协会代表团」として

中華人民共和国建国二十五周年と日本中国

国交正常化二周年の祝賀会参加 揚州の法

淨寺に建てられた鑑真記念堂を見る 日中

間直行定期便中國民航一番機で

同行＝中島健蔵夫妻・宮川寅雄・島野武・武藏川

喜偉・安田順恵・有吉佐和子・白土吾夫・

佐藤純子

北京 九月二十九日～十月五日

南京 十月五日～八日

揚州 十月六日～七日

上海 十月八日～十一日

六十八歳

一九七五＝昭和五十年

五月八日～五月二十七日

中国（第五回）

行先＝北京・洛陽・西安・延安・無錫・上海

目的＝「日本作家代表团」團長として

同行＝水上勉・白土吾夫・戸川幸夫・庄野潤三・

司馬遼太郎・小田切進・福田宏年・佐藤純

子・（夫人）ふみ

北京 五月八日～九日

洛陽 五月十日～十一日

西安 五月十一日～十四日

延安 五月十四日～十五日

北京 五月十五日～二十日

無錫 五月二十日～二十二日

上海・北京 五月二十二日～二十七日

六十九歳

一九七六＝昭和五十一年

二月二十一日～三月三日

ヨーロッパ（第二回）

行先＝イギリス・スペイン・エーデン・ドイツ

・フランス

目的＝「歐洲文化講演会」（講談社と日本航空共

催の講演旅行）

同行＝五木寛之・尾崎秀樹・久保田裕・三木章・

(大邱)・大田儒城・扶余・慶州

(妻) ふみ

イギリス ロンドン

二月二十日～二十三日

スペイン マドリッド

二月二十三日～二十五日

スエーデン ストックホルム

二月二十五日～二十七日

ドイツ ハンブルク

二月二十七日～二十九日

フランス パリ

二月二十九日～三月一日

昭和五十一年十月「遠征路」を刊行

中国 (第六回)

九七六＝昭和五十一年 六十九歳

十一月二十九日～十二月十五日

行先＝北京・大同・杭州・紹興・蘇州・上海
目的＝「日本作家代表団」団長として訪中

同行＝大岡信・白土吾夫・巖谷大四・伊藤桂一・

清岡卓行・辻邦生・秦恒平・佐藤純子・ふ

韓国 (第三回)

行先＝ソウル・済州島(西帰浦)・釜山・海印寺

北京 十一月二十九日～十二月一日

目的＝「風涛」に関する史蹟と石塔を求めての旅

大韓民国芸術院の招待

同行＝(妻) ふみ

ソウル 六月五日～六日

濟州島 六月六日～九日

釜山・大邱・大田 六月十日～十二日

ソウル 六月十二日～十六日

大同
十二月一日 ～ 三日

北京
十二月三日 ～ 九日

杭州
十二月九日 ～ 十日

紹興
十二月十日 ～ 十一日

蘇州
十二月十一日 ～ 十三日

上海
十二月十三日 ～ 十五日

イラク バクダツド

三月三十一日 ～ 四月二日

イラン テヘラン

四月二日 ～ 四日

トルコ イスタンブール

四月四日 ～ 六日

一九七七＝昭和五十二年

七十歳

三月二十七日 ～ 四月八日

エジプト・イラン（第二回）・イラク

行先＝ロンドン・カイロ・ルクソール・バクダツ

ド・テヘラン・イスタンブール

同行＝江上波夫・今里広記・松田・貫井美佐・相

賀徹夫・篠弘・平山郁夫夫妻・妻ふみ

イギリス ロンドン

三月二十七日 ～ 二十八日

エジプト カイロ・ルクソール

三月二十八日 ～ 三十一日

一九七七＝昭和五十二年

七十歳

八月十二日 ～ 九月二日

中国（第七回）

行先＝北京・上海

（ワルムチ・イリ・トルファン・ホータン）

新疆ウイグル自治区訪問（第一回）

目的＝「日本中國文化交流協会代表団」一員として（久々の大型の日本中國文化交流協会

の代表団）

同行＝中島健蔵団長・中島夫人京子・宮川寅雄・

白土吾夫・東山魁夷・藤堂明保・横川健・

司馬遼太郎・團伊玖磨・佐藤純子

蘭州 五月五日 ～～～ 十七日

北京 八月十二日 ～ 十五日

酒泉・安西 五月七日 ～ 九日

ウルムチ 八月十五日 ～～～ 二十七日

敦煌 五月九日 ～ 十四日

イリ 八月十七日 ～ 二十日

北京 五月十七日 ～ 十九日

トルファン 八月二十一日 ～ 二十二日

ホーラン 八月二十三日 ～ 二十五日

北京 八月二十七日 ～ 三十一日

上海 八月三十一日 ～ 九月二日

中国（第九回） 中国第八回の旅行に続く
同行 || 北京・上海・南京・揚州・蘇州

一九七八 || 昭和五十三年 七十一歳

五月二日 ～ 五月十九日 ～ 六月七日

中国（第八回）

行先 || 北京・蘭州・酒泉・安西・敦煌 ||

河西回廊 || 「敦煌」の旅（第一回）

目的 || 初めて敦煌に入る

同行 || 清水正夫夫妻・福沢賢一・横川健・孫平化

・吳従勇・（妻）ふみ

北京 五月二日 ～ 五日

蘇州 六月三日 ～ 四日

一九七八 || 昭和五十三年 七十一歳

五月一日 ～ 五月十九日 ～ 六月七日

揚州の旅（第三回）

同行 || 「日本作家代表団」團長として

同行 || 水上勉・白土吾夫・阪田寛夫・城山三郎・

奥野健男・尾崎秀樹・三好徹・山田智彦・

佐藤純子

北京 五月十九日 ～ 三十日

南京 五月三十日 ～～～ 六月三日

揚州 六月一日 ～ 二日

蘇州 六月三日 ～ 四日

上海 六月四日 ～ 七日

北京 十月二十六日 ～ 二十七日

一九七八年 昭和五十三年

七十一歳

十月八日 ～ 十月二十七日

アフガニスタン（第三回） パキスタン（第一回）

行先 ～ アフガニスタン・パキスタン

目的 ～ クシヤン王朝の跡などを訪ねる

同行 ～ 横口隆康・松山善三・高峰秀子・加藤九祐

・穗坂幹夫・松本和夫・志村栄一・西山三

千樹

十月七日 ～ 成田泊

インド デリー ～ 十月八日 ～ 九日

アフガニスタン カブール・バーミヤン・プレホ

ムリ・マザリシャリフ

十月九日 ～ 十六日

パキスタン ペシャワール・スワット・ラワルピ

ンディ・ラホール・カラチ・ラルカナ

十月十七日 ～ 二十六日

一九七九年 昭和五十四年

七十二歳

七月二十四日 ～ 二十九日

中国（第十回）
蘇州 揚州 揚州の旅（第四回）

目的 ～ 映画「天平の甍」撮影班の激励に口ヶ地蘇
州を訪れる

関係 ～ 熊井啓ほか東宝映画の関係者 記者数人

蘇州 七月二十七日 ～ 二十八日

揚州 七月二十七日 ～ 二十八日

一九七九年 昭和五十四年

八月六日 ～ 八月二十七日 ～ 九月六日

七十二歳

中国（第十一回）

行先 ～ 新疆ウイグル自治区訪問（第二回）

北京・ウルムチ・トルファン・カシュガル

～ アクス・クチヤ ～ 北京

同行＝宮川寅雄・圓城寺次郎・樋口隆康・佐藤純

子・横川健

北京 八月六日 ～ 八日

ウルムチ 八月八日 ～ ～ 十一日

トルファン 八月九日 ～ 十日

カシュガル 八月十一日 ～ ～ 十八日

アトシ・ヤルカンド 八月十二日 ～ 十四日

クチャ 八月十八日 ～ ～ 二十三日

アクス 八月二十日 ～ 二十一日

北京 八月二十四日 ～ 二十七日

中国 (第十二回)

目的＝「NHKシリクロード取材班」と共に(1)

行先＝北京・蘭州・酒泉・敦煌・張掖・武威＝

河西回廊＝「敦煌」旅行(第二回)

同行＝NHK取材班とともに 田川純一・和崎信哉・大塚清吾・常書鴻夫妻

一九七九＝昭和五十四年 七十二歳

八月六日 ～ 八月二十七日 ～ 九月六日

パキスタン(第2回) 中国第十一回の旅行に続く
行先＝ラワルピンディ・ギルギット・ナガール・

フンザ

目的＝パキスタン北部に旅行

同行＝樋口隆康・西山三千樹・松本和夫

八月二十七日＝北京からパキスタンへ
ラワルピンディイ 八月二十七日 ～ 二十八日

ギルギット 八月二十八日 ～ ～ 九月一日

張掖 八月二十九日 ～ 三十一日

酒泉 十月七日 ～ ～ 十五日

敦煌 十月九日 ～ 十四日

十月四日 ～ 十月二十日

七十二歳

同行＝NHK取材班とともに 田川純一・和崎信哉・大塚清吾・常書鴻夫妻

行先＝北京・蘭州・酒泉・敦煌・張掖・武威＝

河西回廊＝「敦煌」旅行(第二回)

目的＝「NHKシリクロード取材班」と共に(1)

行先＝ラワルピンディ・ギルギット・ナガール・

北京 十月四日 ～ 五日

蘭州 十月五日 ～ 七日

酒泉 十月七日 ～ ～ 十五日

敦煌 十月九日 ～ 十四日

張掖 十月十五日 ～ 十六日

武威 十月十六日 ～ 十八日

北京 十月十八日 ～ 二十日

同行＝清水公照・平山郁夫夫妻・松本昭・長瀬嘉
平・奥源造・平沢一郎・高木暢之

三月二十日＝成田泊

九七九＝昭和五十四年

七十二歳

十一月二十四日 ～ 十一月三十日

中国（第十三回）

行先＝北京・桂林 桂林は初めて

目的＝映画「天平の甍」の撮影現場を訪問

現場のスタッフと会う

関係＝田村高広・中村嘉葎雄・高峰三枝子・藤真

利子・熊井啓他

桂林 十一月二十六日 ～ 二十八日

七十三歳

九八〇＝昭和五十五年

七十三歳

三月二十一日 ～ 四月三日

インドネシア

行先＝ジャカルタ・ジョクジャカルタ・バリ島

目的＝ボロブドール仏教芸術視察団

ジャカルタ 三月二十一日 ～ 二十四日

ジョクジャカルタ 三月二十四日 ～ 三十日

バリ島 三月三十日 ～ 四月一日

ジャカルタ 四月一日 ～ 二日

九八一＝昭和五十五年

七十三歳

四月三十日 ～ 六月一日

中国（第十四回）

行先＝北京

ワルムチ・ホーラン

新疆ウイグル自治区訪問（第三回）

二ヤ・アチャン・チエルチエンおよび

チャルクリク＝西域南道

目的＝NHKシルクロード取材班とともに（2）

同行＝NHK取材班・長沢和俊・田川純三・吉川

研・郭宝祥・李一錫

北京 四月三十日 ～ 五月二日

ウルムチ 五月二日 ～ 六日

ホーラン 五月六日 ～ 七月

ニヤ 五月七日 ～ 十六日

チエルチエン 五月十六日 ～ 二十三日

アチャン 五月十八日 ～ 十九日

チャルクリク 五月二十日 ～ 二十二日

ウルムチ 五月二十三日 ～ 二十五日

北京 五月二十九日 ～ 六月一日

北京 五月二十九日 ～ 六月一日

一九八〇 ～ 昭和五十五年

七十三歳

八月四日 ～ 八月十六日

中国（第十五回）

行先＝北京・上海・フホホト・パオトウ

内
蒙古自治区の旅

目的＝中国人民对外友好协会の招きにより、TV

映画「蒼き狼」のロケ地となつた沙漠や草

原地帯をたずねた奥地の七里明沙漠まで入

る 加藤剛主演

同行＝中島京子・白土吾夫・佐藤純子・（妻）ふ

み・（孫）朋子

北京 八月四日 ～ 七日

バオトウ

八月七日 ～ 十日

フホホト

八月十日 ～ 十二日

北京・上海

八月十二日 ～ 十六日

一九八一 ～ 昭和五十六年

七十四歳

ヨーロッパ（第三回）

行先＝オランダ・ドイツ・フランス

目的＝絵画を見る旅

同行＝（妻）ふみ・（長男）修一・（次男）卓也

ドイツ ハンブルク

八月二十二日 ～ 八月二十七日

オランダ アムステルダム・ハーグ

八月二十七日 ～ 八月三十一日

ドイツ ハイデルブルグ・ローテンベルグ・ミュンヘン

上海 九月二十八日～二十九日

九月一日～九月五日

九月八日～昭和五十七年

七十五歳

フランス パリ

九月十日～九月十九日

九月五日～九月九日

ヨーロッパ（第四回）・フランス

行先＝パリ

九八一 昭和五十六年

七十四歳

九月二十三日～九月二十九日

「日仏の明日を考える会」文化部門に日本の文学作品を仏語に訳し紹介する事を提案

中国（第十六回）

行先＝北京・上海・曲阜

「孔子」取材の旅（第一回）

目的＝魯迅生誕百周年記念集会参加

「日本中國文化交流協会代表団」団長

九八二 昭和五十七年

七十五歳

同行＝白土吾夫・北村和夫・堤清二・岩波雄二郎

・宮本研・佐藤純子・横川健・（妻）ふみ

み

北京 九月二十三日～二十六日

中国（第十七回）

行先＝北京

九月二十七日～九月二十九日

目的＝「日中國交正常化十周年記念祝賀会」参加

曲阜 九月二十六日～二十八日

「日本代表団」団長として

同行 || 白土吾夫・横川健

九八一 || 昭和五十七年

七十五歳

十二月二十九日 ↘ 一月六日

七十五歳

中国 (第十九回)

行先 || 北京・上海

目的 || 家族とともに北京で初めて正月を過ごす

同行 || 白土吾夫夫妻・佐藤純子・(妻)ふみ・

(次男)卓也・(孫)義明

北京 十二月二十九日 ↘ 一月四日

上海 四日 ↘ 六日

目的 || 「日本中国文化交流協会代表団」として
同行 || 白土吾夫・綠川亨・清岡卓行・武満徹・大

越幸夫・佐藤純子・(妻)ふみ

九八二 || 昭和五十八年

七十六歳

上海・北京 十一月二十一日 ↘ 二十三日

济南・淄博 十一月二十四日 ↘ 二十六日

中国 (第二十回)

行先 || 北京

北京 十一月二十六日 ↘ 二十九日

目的 || 「『人民中国』創刊三十周年記念慶祝会参

加代表团

鄭州・淮陽・商丘

十一月二十九日 ↘ 十二月一日

同行 || 白土吾夫・横川健

北京

十二月二日 ↘ 三日

同行 || 白土吾夫・横川健

十二月二十九日 ↘ 翌年一月六日

九八三 || 昭和五十七年

中国 (第十八回)

十一月二十二日 ↘ 十二月三日

中国 (第十八回)

行先 || 上海・北京・濟南・淄博

鄭州・淮陽・商丘

「孔子」取材の旅 (第二回)

目的 || 「日本中国文化交流協会代表団」として

同行 || 白土吾夫・綠川亨・清岡卓行・武満徹・大

越幸夫・佐藤純子・(妻)ふみ

九八四 || 昭和五十八年

七十六歳

上海・北京 十一月二十一日 ↘ 二十三日

济南・淄博 十一月二十四日 ↘ 二十六日

中国 (第二十回)

行先 || 北京

北京 十一月二十六日 ↘ 二十九日

目的 || 「『人民中国』創刊三十周年記念慶祝会参

加代表团

鄭州・淮陽・商丘

十一月二十九日 ↘ 十二月一日

同行 || 白土吾夫・横川健

北京

十二月二日 ↘ 三日

同行 || 白土吾夫・横川健

十二月二十九日 ↘ 翌年一月六日

一九八三 || 昭和五十八年

七十六歳

北京 十二月十日 ～ 十五日

六月二十四日 ～ 六月二十六日

鄭州 十二月十五日 ～ 十七日

中国（第二十一回）

成都 十二月十七日 ～ 二十日

行先 || 北京

上海 十二月二十日 ～ 二十二日

目的 || 廖承志葬儀列席

「日本中国文化交流協会代表団」團長

同行 || 中島京子・宮川寅雄・千田是也・杉村春子

・圓城寺次郎・佐藤純子

一九八三 || 昭和五十八年

七十六歳

十二月十日 ～ 十二月二十二日

中国（第二十二回）

行先 || 北京・上海・鄭州・開封・葵丘・成都 ||

「孔子」取材の旅（第三回）

開封と成都は初めて

目的 || 「日本中国文化交流協会代表団」として

同行 || 東山魁夷夫妻・夏堀正元・团伊玖磨夫妻・

白土吾夫・佐藤純子・（妻）ふみ

七十七歳

北京 十二月十日 ～ 十五日

鄭州 十二月十五日 ～ 十七日

成都 十二月十七日 ～ 二十日

上海 十二月二十日 ～ 二十二日

目的 || 廖承志葬儀列席

「日本中国文化交流協会代表団」團長

十一月八日 ～ 十一月二十二日

中国（第二十三回）

行先 || 北京・ウルムチ・ハミ・西安 ||

新疆ウイグル自治区（第四回）

目的 || 「日本中国文化交流協会代表団」團長とし

て訪中

同行 || 白土吾夫・鈴木治雄夫妻・竹西寛子・大江

健三郎・吉永小百合・佐藤純子・（妻）ふみ

北京 十一月八日 ～ 九日

ウルムチ 十一月九日 ～ ～ 十四日

ハミ 十一月十一日 ～ 十二日

西安 十一月十四日 ～ 十五日

北京 十一月十五日～二十二日

一九八五||昭和六年

七十八歳

六月十一日～六月二十五日

ソビエト（第三回）・ドイツ

行先||シベリア・ロシア・ドイツ

目的||TBS開局三十周年記念番組「シベリア大

紀行」の出演の旅

同行||椎名誠・大越幸夫・篠崎敏男・（妻）ふみ

中国（第二十四回）

六月十日||上野～新潟

シベリヤ・ハバロフスク・イルクーツク・ヤクー

ツク

六月十一日～十九日

ロシア モスクワ

六月十九日～二十一日

ドイツ ベルリン・デュッセルドルフ

六月二十一日～二十四日

一九八六||昭和六十一年

七十九歳

四月二十日～五月一日

一九八五||八月二十九日～九月四日まで

中国（第二十五回）

楼蘭行きの旅行計画 しかしその前日に北

京より延期の要請あり突然中止 井上靖は
ついに小説「楼蘭」の舞台に立つことはな

かつた

行先||シベリア・ロシア・ドイツ

九八五||昭和六年

七十八歳

十月十四日～十月十九日

同行||日中友好二十一世紀委員会第2回会議出席

行先||北京・大連（会議場所）

目的||日中友好二十一世紀委員会第2回会議出席

同行||向坊隆・石川忠雄・大来佐武郎・鈴木治雄

・佐藤欣子・小西財団と外務省の関係者

北京 十月十四日～十九日

大連 十月十五日～十七日

目的＝中華人民共和国文化部の招待　日本人として

て初めて北京大学名誉博士号を授与される

行先＝北京・鄭州・駐馬店・開封・濮陽＝

河南省＝「孔子」取材の旅（第四回）

同行＝白土吾夫・佐藤純子・横川健・（長女）幾世

北京　四月二十日～二十三日

鄭州　四月二十四日～二十七日

駐馬店　四月二十五日～二十六日

開封　四月二十七日～二十八日

濮陽　四月二十八日～二十九日

北京　四月二十九日～五月一日

一九八七＝昭和六十二年　昭和六十二年六月「孔子」を連載

一九八七＝昭和六十二年

八十歳

五月五日～五月二十四日

ヨーロッパ（第五回）

目的＝「現代日本文学選集」と「現代日本詩選集」

の仏語版刊行を祝う会をパリで開く（小西

国際交流文化財団主催）

「孔子」取材の旅（第五回）

行先＝北京・鄭州・信陽＝

中国（第二十六回）

十月二十九日～十一月八日

八十歳

一九八七＝昭和六十二年

五月五日～五月二十四日

八十歳

行先＝イスイス・フランス・イタリア

同行＝松村善二郎・大江健三郎・清岡卓行・（妻）

ふみ・（長女）幾世

スイス　インターラーケン

五月六日～八日

フランス　ディジジョン・パリ・ストラスブール

五月八日～十四日

イタリア　フィレンツェ・ベネチア

五月十四日～十九日

フランス　パリ

五月十九日～二十四日

目的＝中国文化部の招きで訪中

北京 五月九日 ～ 十二日

同行＝白土吾夫・岩波剛・佐藤純子・横川健

北京 十月二十九日 ～ 十一月二日

鄭州 十一月二日 ～ 六日

信陽 十一月三日 ～ 五日

北京 十一月六日 ～ 八日

不足部分の多い表になつておりますが、とりあえず、調べて分かつたところまでを纏め、掲載いたしました。今回詳しく述べなかつた箇所は、さらに時間をかけて調べていくつもりであります。

九八八＝昭和六十三年 八十一歳

五月三日 ～ 五月十二日

中国（第二十七回）

行先＝北京・濟南・曲阜 ～ 河南省

「孔子」取材の旅（第六回）

目的＝北京大学創立九十周年記念集会に出席

映画「敦煌」の特別試写会に出席

同行＝白土吾夫・佐藤純子・横川健

北京 五月三日 ～ 六日

濟南 五月六日 ～ 九日

曲阜 五月七日 ～ 八日

（表作成者 黒田佳子）

世田谷文学館は「芦花公園駅」の駅名の通り、徳富蘆花記念館のある蘆花恒春園に程近く、武蔵野の緑を色濃く残す閑静な場所にある。

「世田谷文学館」誕生

三十四年間の創作活動の

拠点となつた世田谷に

世田谷には、明治以来今日まで数多くの文学者が居を構え、また作品に世田谷を描いている。ゆかりの作家には、主な作家だけでも、徳富蘆花、志賀直哉、横光利一、大岡昇平、井上靖といった近代文学史を彩る重要な作家をはじめ、詩人の北原白秋、萩原朔太郎、三好達治、歌人の斎藤茂吉、中村汀女、時代小説の山岡荘八、海音寺潮五郎、探偵小説の横溝正史、女性作家では、林芙美子、野上弥生子、現在活躍中の作家には水上勉、安岡章太郎、北杜夫、大江健三郎、と錚々たる顔触れである。

生田 美秋

世田谷文学館は平成七年四月に開館。企画展（年二回）、絵本原画展、収蔵品展などの展覧会のほか、講

演会、朗読会、創作講座、コンサート、映画会、文学散歩など幅広い活動を実施、佐伯彰一館長のもとダイナミックな「動く、活動する文学館」を目指している。

「井上靖と世田谷文学館」

開館して日も浅く、井上靖についての資料の収集、調査、研究、展示のいずれもが緒についたばかりで、全国の井上靖記念館と比べると全てはこれから、といつていい状態である。

井上靖が、品川区大井滝王寺町から世田谷区世田谷四一四一〇（現・世田谷区桜三一五一—〇）に移り住んだのは、「氷壁」を「朝日新聞」に、「天平の甍」を「中央公論」に連載中の昭和三十二年（一九五七）である。

井上靖は、昭和三十二年から亡くなる平成三年までの三十四年間、この世田谷を創作活動の拠点とし、現代小説、自伝小説、歴史小説、詩、エッセイの分野で次々と名作を生み出した。四十二歳、作家としては遅いデビューであったが、亡くなるまで現役の作家として活躍、名実ともに、文学界の最高に位置する作家となつた。

昭和五十七年には、数々の業績と区への貢献から世田谷区の名誉区民として顕彰された。

今年で十五号を数える「文芸せたがや」、「世田谷文学賞」の生みの親でもある。

翌三十三年には、「天平の甍」により芸術選奨文部大臣賞を、三十四年には「氷壁」その他により芸術院賞を受賞する。それまで、多くの読者を獲得しながらも、大衆小説家と呼ばれ、芸術性に乏しいとの評価があつ

たようだが、この頃より「これまで私小説に独占された抒情を、大衆文学に任されてゐた物語性とを統合して、新しい型の小説をつくりだした」（中村光夫）との高い評価が定着した。

井上邸について、同じ世田谷の住民でもあつた山本

健吉は「流行作家の邸宅と言つても、別に派手など」
ろはない。あまり建物に凝るといふこともしないらしい。

（略）世田谷の馬事公苑に近い新建ての家である」と書いている。

私も三度お伺いしたが、華美な所はないが庭が広く、書斎も応接間も度々写真で拝見して知っていた、そのままであつた。現在も夫人のふみさんが、野菜嫌いの靖をいつの間にか野菜党にしたという無農薬野菜の畑を作りながら守つておられる。

「主要な展示資料」

常設展示室では、井上靖を中心年に年一回穂高に登り、酒を酌み交した文学関係の友人たちとの会「かえる会」に集まつた同じ世田谷の山本健吉、杉森久英とともに紹介している。主な展示資料は、「孔子」「美術断想」の原稿、図書は『北国』『闘牛』『氷壁』、世田谷の九品仏が舞台として描かれた『憂愁平野』や、『流転』「闘牛」「獵銃」の掲載誌、「氷壁」の新聞切り抜きなどで、肉筆資料は僅かだが図書、初出誌、新聞切り抜きは、ほぼ資料として収蔵している。

ビデオブースでは、記録映画「井上靖」（約二十分）を鑑賞していただける。音と光と映像の演出で作家の居住、作品の舞台が分かる文学マップ、大型五十インチプロジェクターで「文学のまち・世田谷」を紹介する映像コーナーでも井上靖を取り上げている。

創作の拠点となり、終の住処ともなつた地、世田谷にふさわしい活動を、ご遺族、先輩文学館の皆様の指導の下に展開していきたい。

（世田谷文学館 学芸係長）

「闘牛」「獵銃」の掲載誌、「氷壁」の新聞切り抜き

旧制高等学校記念館は、教育史上大きな役割を果たした旧制高校の資料を収集、保存、展示する博物館として、平成五年七月、全旧制高校同窓会の協力を得て開館しました。

旧制高等学校記念館

平成五年松本市に開館

四高出身の井上靖の展示も

松本市には、全国で九番目の高等学校として大正八年、松本高等学校が設置され、長野県の文化と教育の発展に貢献しました。しかし、旧制高校は戦後の学制改革により廃止となり、松本高校も、新制の信州大学に生まれ変りました。大学移転後、校舎取壊しの決定を、同窓会と市民の熱心な保存運動が覆し、跡地は市有財産となつて、現在敷地は公園、建物は文化会館として広く市民に利用されています。校舎本館・講堂は大正時代を代表する木造洋風建築物であり、ともに文化財として長野県宝の指定を受けています。旧制高校の建物は、時代とともに姿を消しつつありますが、人びとの息づかいが聞こえる校舎の存在こそ、記念館建設の原動力だったと言えるでしょう。

北原 剛弘

四高出身の井上靖氏の展示も

館内は、旧制高校の足跡を後世に伝え残すため、特徴である、自治自立の精神と教育の歴史、活躍されている文化人について、寮歌の一節を交えながら展示しています。一階には、自由に入場できるギャラリー、語り合いの場ともなる談話室があり、二階は旧制高校全体と、最も資料数の豊富な松本高校の資料を展示しています。三階では「芸文の華」をテーマに旧制高校出身の文学者を取り上げて紹介していますが、川端康成（一高）、梶井基次郎（三高）らとともに四高出身の井上靖氏について、高校時代を描いた詩「流星」、小説「北の海」を中心いて展示させていただいているます。井上氏の文学のすべてを語ることはできませんが、学生時代の希望、迷い、思索する姿は現代の若者の心にも触れるものと思います。

学校別特別展は本年は二高、四高、五高など

「天平の甍」「本覚坊遺文 千利休」など井上氏の作

品を映画化なさった熊井啓監督は、松本高校から信州大学に学ばれ、前述の校舎保存に力を入れて下さったお一人です。建物が解体の危機に見舞われた時、いち早く建築様式の文化財的価値に着目され、失つては一度と再び得られぬ事を強調し県宝指定への波を起させました。井上氏からは「ぜひ保存しなさい。勉強のため金沢の四高本館を見に行きなさい。」と励まされ、力づけられたと語っておられました。旧制高校を愛する皆様の熱い思いをいただいて校舎は残り、また記念館が開館できました。館では資料の散逸をくい止めよう、六年計画で学校別に出品していただく特別展を開催しています。既に十三校について展示させていただき、本年六月には創立百周年を迎える二高、四高、五高および七十五周年になる浦和高、大阪高、福岡高の資料展を計画しています。これからも近代高等教育の資料館として機能充実に努めるとともに、皆様に愛されるよう、この若き血潮みなぎる学び舎を育んでいきたいと願っています。

平成八年一月（旧制高等学校記念館 館長）

井上靖記念文化財団

平成七年度 事業 報告

井上 修一

平成七年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

(一) 第三回井上靖文化賞発表ならびに贈賞。文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました贈賞対象を、数次にわたる選考で四氏に絞り込み、平成七年十一月十三日に選考委員の先生方による最終選考が、

山の上ホテルで行われました。その結果陳舜臣氏に贈賞が決まり、当日報道、出版関係各社に通知されました。また平成八年一月十九日には、百五十余名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

第一回受賞者の小澤征爾氏、第二回受賞者のドナルド・キーン氏、今回の陳舜臣氏とお名前をならべてみ

ますと、井上靖文化賞の持つ「国際性」がはつきりと見えてきたような気がいたします。賞の性格は受賞者

によって決まると言われていますが、選考委員の先生方が、本賞に託されたお考えの新しさの賜物と心より感謝しております。

なお選考委員の先生方は、大江健三郎、大岡信、司馬遼太郎、樋口隆康、平山郁夫（五十音順 敬称略）の五氏です。

(二) 平成七年四月二十八日から六月六日まで、金沢の石川近代文学館において本財団後援で井上靖特別展「輝く五月詩人祭」が行われました。期間中の五六日は井上靖の誕生日であり、また鑑真和尚寂滅の日でもありますので、記念行事が行われました。

邦楽の生演奏をバックに名取裕子、山口崇氏の詩の朗読と、本財団理事の大岡信氏の講演がありました。小説「しろばんば」の舞台となつた湯ヶ島小学校校庭を使つた、夏の夜の楽しいイベントでした。

(五) 平成七年九月一日から十月八日まで世田谷区立世田谷文学館で行われた「深田久弥と山の文学展」に「水壁」の資料を展示しました。

(三) 平成七年七月一日から九月三十日まで滋賀県伊香郡高月町渡岸寺高月町立図書館内「井上靖記念室」にて、本財団後援で写真展「井上靖の撮つたアフガニ

スタン一九七三」が行われました。

(四) 平成七年八月五日に静岡県田方郡天城湯ヶ島町（「文学のふるさと天城湯ヶ島実行委員会」）の主催、本財団ならびに静岡新聞社、SBS静岡放送、伊豆日日新聞社の後援で、「夏の文艺劇場——井上靖・天空を翔る」が行われました。

財団後援にて「井上靖展」が成功裡に行われました。

またこの文学展の初日と十月十日には財団から講師を派遣し、講演会が催されました。

(七) 平成八年一月二十八日に、静岡県田方郡天城湯ヶ島町において、天城湯ヶ島町主催の「追悼・井上靖」が行われました。墓参、井上靖作品読書感想文コンクール入選者表彰のあと、本財団派遣の講師による記念講演が行われました。

(八) 平成八年一月から三月三十一日まで、米子市の市立図書館の展示コーナーにおいて、本財団の協力で「井上靖没後五周年展」を行いました。

(九) 「井上靖文化交流賞」の新設について
本財団は、設立当初より「海外における日本文化の研究者又は研究団体に対する援助」を事業の一つに考えてまいりました。理事会・評議員会におきましても

かねてよりこの事業の実現方法を検討しておりましたが、このたび表記の賞を新設することになりました。

第一回の本年度は中国の文学者、日本文学研究者で中國日本友好協会副会長の林林氏にお贈りいたします。

贈呈式ならびに祝賀パーティーは日本中国文化交流協会と一ツ橋綜合財團のご協力により四月十日（水）二時よりホテルニューオータニにて行いました。

(十) なお平成七年度の本財団の理事・評議員は次の方がたです。

監事	井上ふみ
理事長	井上修一
常任理事	大岡信 相賀徹夫 上林吾郎
理事	小西甚右衛門 佐藤亮一 司馬遼太郎
	高崎芳郎 德間康快 野間佐和子
	平山郁夫 横地治男
	三木啓史

評議員

井上卓也 浦城幾世 大越幸夫

尾崎秀樹 角川歴彦 黒田佳子

嶋中鵬二 高野昭 高原須美子

仲木都富 緑川亨 (五十音順・敬称略)

司馬遼太郎氏逝去

財団の理事ならびに井上靖文化賞の選考委員として長らくご指導いただいておりました司馬遼太郎先生は、平成八年二月十二日夜、逝去されました。

生前の多大なる尽力に対し心より感謝いたしますとともに、深く哀悼の意を表します。

(井上靖記念文化財団理事)



井上靖に関する

文学館・記念館

住 所 入 王

駿河平

井上文学館

所在地＝静岡県駿東郡長泉町駿河平
電話＝（〇五五九）八六一一七七一

湯ヶ島町

伊豆近代文学博物館

所在地＝静岡県田方郡天城湯ヶ島町湯ヶ島

九九二一一八

電話＝（〇五五八）八五一一一〇

金沢市

石川近代文学館

所在地＝石川県金沢市広坂中央公園内

電話＝（〇七六二）六一一六〇九

日南町

野分の館

所在地＝鳥取県日野郡日南町神福

電話＝（〇八五九）八二一一一一

高月町立図書館

井上靖記念室

所在地＝滋賀県伊香郡高月町渡岸寺一一五

電話＝（〇七四九）八五一四六〇〇

旭川市

井上靖記念館

所在地＝北海道旭川市四区一条一丁目

電話＝（〇一六六）五二一一七四〇

湯ヶ島小学校

記念室

所在地＝静岡県田方郡天城湯ヶ島町湯ヶ島湯ヶ島小学校内

米子市 アジア博物館・井上靖記念館

所在地＝鳥取県米子市大篠津町五七番地

電話＝（〇八五九）二五一一二五一

奈良シルク・ロード博物館 奈良公園館

所在地＝奈良市雜司町四六九

電話＝（〇七四二）二二一〇三七五

内灘町立図書館 井上靖文庫

石川県河北郡内灘町大清台

電話＝（〇七六二）八六一一九三〇

姫路市 姫路文学館

所在地＝兵庫県姫路市山野井町八四番地

電話＝（〇七九二）九三一八二二八

*平成八年五月に別館（仮称）が開館の予定

大阪府 大阪井上靖文庫

所在地＝大阪府和泉市青葉台一八の三

電話＝（〇七二五）五六一六七六三

*開館は日曜日のみ

松本市 旧制高等学校記念館

所在地＝長野県松本市県三一一

電話＝（〇二六三）三五一六二二六

旭川市 旭川北鎮記念館

所在地＝北海道旭川市春光町 陸上自衛隊旭川第二師

団内

世田谷区 世田谷文学館

所在地＝東京都世田谷区南烏山一一〇一〇

電話＝（〇三）五三七四一九一一

電話＝（〇一六六）五一一六一一一

★平成八年、六月五日、鳥取県日南町に総合文化センターが開館される予定。

同館内に「井上文学展示室」が造られ、また、同日開館の日南図書館には「井上靖コーナー」が設置される。

鳩のお知らせ

★平成八年、五月二十五日、正午 奈良県唐招提寺境内において 井上靖と安藤更生を顕彰する記念碑の除幕式が予定されている。

安藤更生氏（一九〇〇年～一九七〇年）は美術史家として、多くの研究に打込み、鑑真和尚の研究のかたわら、即身仏の研究などの業績を遺している。井上靖は安藤更生著作の『鑑真大和上伝之研究』から題材を得て代表作、小説『天平の甍』を著し、また、安藤氏の即身仏の研究に心を惹かれて『補陀落渡海記』の作品を書いている。

★新潮社から『井上靖全集』（全二十八巻 別巻一）が刊行中。

監修者は司馬遼太郎、大岡信、大江健三郎の三氏。各巻月報の解説、および作品解題は、編集協力の曾根博義氏により担当されている。また、月報には毎号、井上ふみもエッセイを載せている。

★宮崎潤一氏の研究書『若き日の井上靖研究』（『現

代詩人論叢書6』土曜美術社出版販売）が「第三

十三回群馬文学賞」を評論部門で受賞しました。

★平成八年五月の中頃「講談社」より 隨想集『旬菜歳時記』（井上ふみ著）が出版される。

著者が三年九ヶ月「ソフティア」に連載していた料理に関する随筆をまとめたものです。井上ふみ第五冊めの出版物になる。

★「パルコ毎日新聞カルチャーシティ」、渋谷校、厚木校にて、エッセイスト宮野力哉氏の講義で七回にわたり「井上靖」の講座が開かれる。

テーマ・「美術への道 その師」・「井上靖と美術家たち」・「井上靖と日本画」・「井上靖と洋画」・「井上靖と仏教美術」・「井上靖とヨーロッパ美術」・「井上文学と美術」

期日・四月（三日、十七日）五月（一日、十五日、二十九日）六月（五日、十九日）

★平成八年一月には「潮出版社」より井上ふみ、八十年の人生の思い出の隨想集『やがて芽を吹く』が出版されている。

★平成八年一月末より三カ月、米子市立図書館の一隅にて井上靖のミニ小品展が開催された。

十月の詩

井上靖

十月は、すべて

白いものが美しくなつて来る。

石のおもて。すすきの穂。

丘陵の上の雲。若い女の手指。

葡萄酒のレツテル。

ビルディングの壁画。

十月は、なべて

傾いたものが美しくなつて来る。

崖。坂のある街。

階段。午後の薄ら陽。

カーヴを切るオートバイ。

普請場の鉄骨。

『井上靖全集』

「拾遺詩篇」所収

編集後記

多くの方の力に支えられて、一羽迷いまよい飛び出した「伝書鳩」も、もう第三号。そろそろ大空を飛翔する鳩の群として、力強く活躍しなければと感じています。

号を重ねることに載せるべき内容もふえ、次号からは、どのようにしたらより多くの内容を、読みやすい枚数の中に抑えて載せることができるかという工夫が必要になってくるようです。

今年も各地から、たくさんの活動のニュースが集まりました。みな様に興味深く読んでいただけるように心がけながら、編集に取りくんでもあります。

黒田 佳子

伝書鳩 第三号 一九九六年五月発行
編集者 黒田佳子
発行 横浜市青葉区新石川三一八一九
(財)井上靖記念文化財団